
右腕

ばいばるす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右腕

【Nコード】

N6039B

【作者名】

ばいばるす

【あらすじ】

隻腕の少年が失われた右腕を取り戻すとき、部族の聖地は炎に包まれ、運命の齒車が廻りだす。（作中には差別用語が多数使用されておりますので、ご不快に感じる方は申し訳ありませんが閲覧をご遠慮ください）

第一章 隻腕の少年

日没。

灌木や茂みの影が長く大地をはい、赤い円盤が地平にその身を横たえる。

風が渴いた草原の上を吹きすべり、まばらな草をゆらしては散らす。

緋色にそまりゆく草原に騎影が一つ、夕陽をうけて、たたずんでいた。

馬上の騎手はまだ若く、十三四といった年の頃で、草色の頭布を灰褐色の髪にまきつけ、同色の上下に綿をいれた貫頭衣に成長途上の体をつつんでいる。

草原の民である事はあきらかだったが、黒髪黒眼を基調とする彼等の中にあつて、灰褐色の髪と灰緑色の瞳は文字通り異色であつた。

狩猟をたつとび、騎射に関しては比べる者のない草原の民。その一人にしては珍しい事に、少年の背には弓も矢柄やがらもない。

武器といえば、腰に下げた小振りの半月刀一振りのみである。

もっとも、これは別段不思議なことではない。弓が少年にとって用をなさないことは、一目見れば分かる事だつた。

いや、むしろ少年の方が、弓にとって用をなさないと言ふべきだろうか？

少年の長袖の右肘より先の部分は、風をはらむでもなく、ふくら

むでもなく風任せにはためいては、ひるがえっていた。

本来あるべき質感と量感が、その袖布には欠けている。

両腕がそろっていないければ、弓は引けない。その点でいえば、少年が所持している刀も、片腕のみでは武器として、どれだけ実用的であるかは多いにうたがわしかった。

唇を引きむすび、隻腕の少年はこわばった横顔を、夕陽よりやや北、西北西に向けた。

灰緑色の視線の先に、巨大な三角錐が逆光の中に黒く、くつきりとそびえ立つ。

それは少年の部族の間では、神山かむやまと呼ばれる、その名のとおり、人々の信仰と畏怖をあつめる霊山だった。

不毛の大地に牧草地を求めて行きかう遊牧民にとって、草木の緑はは豊穡ほうじやくの象徴であり、山は蒼天と彼等のすむ大地をつなぐ祭壇である。

しかし己が部族の聖地をみているはずの少年の目には、畏怖というよりは、もっと個人的な不安が見てとれた。

「衍葵えんぎっ」

その呼びかけが、山と少年の対峙を終わらせた。

地をたがやして生きる者にとっては、聞こえるか聞こえないかの遠くの声だったが、草原に生きるものにとっては、十分に可聴域である。

少年は、びくりと山から視線を引きはがし、馬首をとって返す。

日没とは反対側の地平線に、小さな影が認められた。

見る見る内に大きくなっていく人馬の一对。集落で何かあったのではないか、という思いがまず最初に頭をかすめた。

そう時を待つことなく馬と乗り手の少女は、えんぎ 衍葵の元にたどり着いた。

溜め息と共に、発せられた第一声が、ふつしよく 衍葵の懸念を払拭する。

「今夜の主役が、こんな場所で一人で何をやっているんだ。みな心配していたぞ」

心配？

衍葵の心配をしている人間などいるだろうか？ いるとしたら、こんな所にいる衍葵を探し当てた張本人、ひなつ 日夏だけだ。

他の者は……そう、あるいは今夜の心配ならしているかもしれない。衍葵が怖じ気づいて逃げ出すと心配しこそすれ、彼等が衍葵個人の心配をする姿は想像しづらかった。

衍葵は曖昧にうなずき、夕陽に目を向けた。

「ごめん、日夏。すぐ戻るつもりだったんだ」

日夏も衍葵の視線を追って紅連の空に目をうつす。

「見事な夕焼けだな。まるで血を刷はいたような赤だ。こういう時は魔が行き交うのだと曾ひいさま様がいつていたか。衍葵、今夜は気をつけろよ。神山に入るんだ。魔にしろ神にしろ、せいぜいとして喰われぬようにな」

「そうだね。獲物を狩るつもりで、自分が狩られたら元も子もない」

笑い合つて、二人はしばらく並んで夕空をながめた。

「不安か？」日夏が聞いた。

衍葵はゆるく頭を振る。

「まるきり不安でないといえば、嘘になるかもしれない。でも、大丈夫だよ。何も大鹿や狼を狩ろうなんて大それた事は考えていない。極端に言えば、別に贅は野鼠のねずみだってかまわないんだ。せいぜい、とつて喰われぬ程度にがんばるよ」

那伽ながぜ是の少年が大人になるための通過儀礼として成人の儀というものがある。

内容はしごく単純で、十五の春の最初の月満ちる夜に神山にはいり、供物となる獲物を狩つて集落にもどつてくるというものである。贅が巫人みこの手で火にくべられ、煙となって蒼天に送られるのを見て、儀式は完結し、少年は戦士の仲間入りをはたす。

おりしも季節は春。

そして今夜は衍葵が十五になって、はじめての満月だった。

「無理はするな、といおうと思っていたんだが、その様子だと、どうやら逆に、はっぱをかけた方がいいみたいだな。丁度いい機会だ。どうせなら、うんと大きな獲物を成人の儀の供物にして、皆をおどろかせてやれ」

日夏に悪気はないのだと分かっている。こんな冗談ような言葉にさえ反応する自分の方がおかしいのだ。

期待をばげみにして頑張れる人間は、自分に自信のある人間だと衍葵は思う。

しかし彼にとっては、むしろ重圧だった。好意はありがたいと思うかたわらで、その期待を裏切ってしまったらという不安の方が、まさってしまう。

何の期待もされない。それはそれで満足とは程遠いのだが、そちらの方が衍葵にとっては常態であり、楽だった。

考えてしまうのだ。弓も引けず、刀も満足には振るえない肩輪の少年。その限界を。

大物を捕らえてきて、みなを驚かせる？
夢想するのは自由だ。

だが現実の惨めさに立ちかえった時、それではよけい傷つくばかりではないのか？

いまの自分には、大物云々はおろか、滞りなく儀式を終わらせる事で頭がいっぱいだというのに。

傷つき、臆病になった心は自衛に閉ざされる。

甘い期待をいだいて、結果だれかの失笑をかうよりは最初から諦めた方がマシだと。下手に真面目になって本気になって、拳句、自分の限界を突きつけられるよりはと。

だから今までそうであったように、これからもずっと部族の日陰者でいいのだと。

口には出せぬ思いを水面下に沈めて、衍葵は表情を取りつくろった。

「がんばるよ」

こんな風に卑屈にあきらめてしまつ自分を自分自身嫌いなように、きつと日夏も好きではない。

だから、口にしない。

自分には分不相応な好意を向けてくれている、たった一人の幼なじみに嫌われたくはなかった。

衍葵は自分が誰かの好意に値すると思ったことはない。

同年代の少年たちは、衍葵を不具の臆病者と断じてはばからなかったし、大人達はさわりがたい膿うみのように彼を敬遠した。

人格の形成期をそういった環境で過ごした子供にとって、健康な自画像を形成するのはむずかしい。

ただ日夏だけは、すこし違った。

どこがどう違ったのか、はっきりとは説明しづらい。兎にも角にも、日夏は、衍葵の身体的欠損をタブーとして扱うことも、それを材料に馬鹿にするようなこともなかった。

衍葵の隻腕は、その混血の証である淡い容姿とともに、彼女にとってには衍葵の個性の一端でしかなかったらしく、なぐさめるでもなく、けなすでもなく、要するにとりたてて注意を向ける対象には映らなかったらしい。

といって配慮を欠いていた訳ではない、というのが不思議だった。

良きにつけ悪しきにつけ、日夏は衍葵を特別扱いしなかった。片腕では無理な事に彼を誘う事はなかったが、そうでない事には遠慮なしに衍葵を連れ出した。

剣の鍛錬もその一つで、日夏がいなかったのなら衍葵の刀は本当にただのお飾りになっていたに違いなかった。

強いて近い表現を探すのなら、それは『対等に扱った』という事だろうか？

彼女にとっては、他の誰に對してと同じ、普通に接しただけなのだろうが、それは衍葵にとっては決して普通ではない事だった。

問題があるとすれば、それは衍葵自身が自分を他者と対等に扱えなかったことだ。対等な立場でとられた態度、言葉も、そうでないと思っている者の心には歪んだ投影をむすぶ。

好意を同情ではないかと疑い、励ましを持てる者の傲慢だと受けとる。友情は憧憬に変質し、時として嫉妬に転化しうる。

太陽のような日夏。いるだけで周りを照らし、暖める。
彼女がいなかったのなら、衍葵の人生は今以上に色あせたものになっていたに違いない。

だが彼女は知っているだろうか？

その明るさが、時に負担なのだと。

温もりは、自分自身の冷えを実感させる。光は周囲に影を産む。
そして、その光がまぶしければまぶしいほどに闇は濃く影を落とすのだ。

衍葵は笑った。

彼にとって、それは使い古された擬態の仮面だ。

「しかし、おおぎょうだな日夏は。こんな誰でもとおる儀式に」

「誰でもという訳じゃないぞ」

力強く日夏は否定した。

「男でなければ、成人の儀はとり行われぬ。己が武と勇をしめし、天へ供物をささげて感謝をあらわし、巫人の立ち会いのもと戦士達の仲間入りを果たせるのは、男に生まれついた者だけだ。

逆にいえば馬や剣の腕前をいくら磨こうとも、男でないものは資格があたえられぬのだ……受けたくても受けられぬものが目の前にいるのに、そうそう浮かぬ顔ばかりするな。腹が立つてくるぞ」

「ああ、ごめん。でも日夏は……」

思わず衍葵はふきだしていた。

昨年のちょうど今頃、日夏が十五になる少し前の一件が思い出された。

彼女は族長である父親に、自分も戦士として承認を受ける権利があると主張し、談判した。だんぱん

資格というなら、ある意味日夏には他の誰よりも成人の儀を受ける資格があったろう。

剣も弓も、男女の力の差の明らかでない年の頃もあって、同年代の少年達から一頭地ぬきん出ていたし、騎射の技術にいたっては熟練した部族の戦士でさえ舌をまく腕前だった。

勇も武も、おうおうにして軽視されがちな知でさえも、彼女に欠

ける事なくそなわっていて、もし男子であつたならと父親である族長を嘆かせた。

しかし、ふだんは娘に弱い族長も、この成人の儀に関してばかりは、にべもなく日夏の主張は突っぱね、許可なく神山に入つたのなら嚴重な制裁を課す、とまで釘をさした。

しかし慣習法だからという以外には寄るべのない父親の論陣に娘が屈することはなく、難航した交渉と激化した親子喧嘩のすえ、日夏は遊び仲間の少年達を引きつれて集落をとびだした。

成人の儀がとり行われるのは十五になつて最初の月満ちる夜であるから、その数日前の事である。

満月が朝の気配に薄れる頃――本当の成人の儀であれば、少年が供物と共に戻つてきてもおかしくはない夜明け前の一刻――に日夏は集落に戻つてきた。

部族の者の手前もあつて、嚴重に処罰するつもりで駆けつけた族長だったが、彼が怒声と平手を飛ばすよりも先に、日夏はゆうぜんと膝を折つて一礼し、地面に並べた品物を示してみせた。

「神山には入つてはならぬという禁は犯しておりませぬ。女人でにょにんあるが故に、成人の儀を行えぬとの仰せに納得した訳ではございませぬが、族長命令とあれば否やはござりませぬ。」

おいに芝居がかった動作であり、口調であつた。

「さりながら草原を渡り、天の下をゆくものとして、我等が天地にあまねく精霊達に供物を捧げるを阻む道理はございますまい。ここにある品々を我が儀と礼と共に、族長様と巫人に託しましょう。我が意を蒼天に届けたるよう」

おごそかに、そう言いおく日夏をよそに、族長の目は地面に置かれた数々の物品にぬい止められていた。

そこには、金と胡椒と、色とりどりの絹織物を始め、東と西とを行き来する貴重な品々が惜しげもなく並べられている。

出て行った時の数倍にも増えた馬の背には、まだほどかれていない荷さえあった。

日夏達が隊商を襲ったのだという事は、誰の目にも明らかだった。

なるほど。遊牧民は時として、農耕地を荒らし、定住民を略奪し、隊商から通行料を徴収し、あるいは襲う。

だが通常、それは歴戦の強者達の練達した連携をもって初めてのぞまれるものである。

商人側も馬鹿ではないのだから、一年をかけた稼業をふいにする事のないよう、それなりに用心と対策をかさねて草原を超える。

ましてや積んでいる荷がこれだけのものとなれば、隊商の規模もそれなりのものだったろう。

その襲撃を十五になるかならないかの一団でやり、ましてや成功させてのけたのだとすれば、これは無茶を通り越して、驚嘆の域だった。

結局ど肝をぬかれた大人達を尻目に、日夏もその仲間もさしたる処罰を受ける事はなく、この一件は後々まで語りつがれる日夏とその一味の武勇伝となった。

衍葵は思い出し笑いに笑う。

「あの時は、おどろいたな。成人の儀の供物に、隊商を襲うなんて、きつと誰も考えつかない」

「まあ、神山に、隊商はうついていないだろうしな」

そういつて日夏は照れたように混ぜつかえした。

衍葵は、この大胆であふれんばかりの生気に満ち満ちた幼なじみに、賞賛と好意を惜しまない一方で、一抹の嫉妬を禁じえない。

彼女は、自分の持ち得ない、また焦がれてやまぬ物を、ありあまる程持っていた。

草原の民の特徴をよく表す青黒の髪、黒曜石の瞳に比べて、自分の淡い色彩のなんと色あせて見えることか。

躍動感にあふれる体躯は、若鹿のようにしなやかで狼のように俊敏。ひとたび弓矢をとればその真価を発揮して遺憾なく、馬上にあつてみれば、いっぶくの絵のように目がうばわれる。

といつて、日夏という少女に普通の子供らしい部分がなかったわけではない。

真夏の陽射しを思わせる黒眼は、大人たちを困らせるイタズラを考へる時ほど、きらめきを増したし、普段は不適に結ばれた唇も、笑うと年相応にくずれるのだった。

勇壮な騎馬の民の中でも、資質という点では誰もが認めるその武勇。

放埒なばかりの自由さと、型破りな行動は、同年代の少年達にとつては反感であれ尊敬であれ何らかの感情を引き出さずにはおかない存在で、日夏は彼等の首領格として、いたずらを率先する一方で、歯止めにもなっていた。

総じて言えば、日夏は彼等をよくまとめあげていた。

ある意味、誰よりも少年の夢を体现する存在が、少女であったのは皮肉である。

しかもその一種、野性的な魅力は、近隣にまで聞こえる彼女の美貌を減じることなく共存していた。

ひとたび髪をほどいて、くしけずり、花と装飾品でもあしらった日には、草原一の美女と称しても名前負けはしていない。

ただ日夏自身がそういう格好を好まないようで、滅多に女らしく装うことはなかった。

衍葵としては普段の日夏の姿の方が、下手に戸惑わないですむぶん安心できたので、べつだん他の者が言うようにもつたいたいとは思わなかった。

じっさい日夏には、金銀の装飾品や上等な衣装などよりも、草原の風の方が似合っていると、衍葵などと思う。

しかし荒くれ者の少年達が、彼女の前で大人しくなるのは、日夏の異性としての魅力とは無関係だ。ましてや族長の娘である事とは何の接点もない。

彼等はい力のない者には従わない。物理的な力がものを言う、遊牧民の気風にあつて、彼等ぐらいの年頃は、特にこの傾向がつよい。

逆にいえば、力のない者、臆病だと認められた者には、父親の地位がなんであろうと、一片の敬意も払われる事はない。

現に衍葵の父親は、部族最強の戦士であり、族長の右腕と信頼が厚かったが、その地位と尊敬が、衍葵個人の評価とはまったく無関係だったのと同様に。

「日夏の婿になる人は大変だな」

「なんだ、いきなり」

「だって、自分より強い男でなければ、夫とは認めないと族長様に宣言したんだろう？」

「ああ、あれは……」

「ばつの悪そうな顔を浮かべる。」

「一種の方便だ。螺族らぞくから、私に婿をどうかという申し出があったな。父上が乗り気で、しつように進めるものだから」

族長の一人娘である日夏に男兄弟はなく、彼女の夫となる者が、次期族長になるものと目されていた。

婿養子の話は噂にうとい衍葵の耳にも届いていたが、じっさいに日夏自身に確かめことはなかった。

「だれか、心に決めた相手でもいるの？」

そう聞くと日夏は肩をすくめてみせた。

「なるほど。その手もあったな」

「じゃあ、政略結婚が嫌なだけ？」

「いや……問題は力の均衡、我等が那賀是ながせにたいして螺族の規模が大きすぎる点だ。」

父上のおっしゃる事にまるで理がないという訳ではない。確かに近隣部族で小競り合いを続けている今の状態は不毛だ。

宥和の手段としての婚姻をつかう。二つの部族が一つに統合され

る。そういう選択肢も排除するべきではないだろう。

しかし問題は、やはり力の釣り合いだ。螺族に比して、我等が那伽^{なげ}是はあまりに小さい。力関係は明白だ。現状でこんな縁談を進めたら、果ては二部族の併合ではなく、一方的な併呑という事になりかねない」

「でも彼等は、螺族^{いそく}は、那伽是の自主性は認め、それでいて、放牧地を持参金にするといっているんだろう？」

那伽是にとっては、悪くない話ではないかという意味合いをこめていった。

「そこが、くさいんだ。上手い話には裏があるか考えて当然だ」
そうなのか。当然なのか。

との感想をおぼえた衍葵に、日夏は自嘲気味に、「私の性格が悪いただけなのかもしれないが」とつけ加えた。

「だがたとえ、婿養子であろうと、一代限りの繋ぎであろうとも、族長は族長。部族の羅針盤だ。他部族のものをそこに据^すえるには、慎重になるに越したことはない」

「族長様はなんて？」

日夏の表情に、普段にない陰りが落ちる。

「父上は……老いた。男子のない焦りもあるのかもしれないが、今あるものを維持する事にばかりに焦点を当てておられる。地歩を固め後顧の憂いを無くそうとあせるあまり、意思決定のバランスを欠いているに見受けられてならない。」

私には那伽^{なげ}是の自主性をおかされる危険性と映るものも、父上にとって杞憂^{きゆう}に過ぎず、私の意見など部族間の宥和の機会を台無しにしかねない、わがまま娘の世迷い言にすぎんだ」

「……」

衍葵に族長と日夏の立場のいずれが正しいのかは分からない。論ずる事さえ、出来はしないだろう。

ただ日夏は衍葵と一つしか変わらない年で、彼女なりに部族の行く末を案じ、部族のためを考えているという事は理解できた。

それに比べて目先の成人の儀で手一杯の自分は、果たして真剣に部族全体の事を考えた事があっただろうか？

「……お前だから、こんな愚痴も言えるんだがな。他の者には言うなよ」

衍葵はうなずいた。

「言われるまでもないよ。でももし、仮に縁談が族長命令だったとしたら？」

日夏の瞳にいたずらっぽい、しかし抜き身の刀のような光がちらつく。

「私が私自身、部族のためになると判断すれば、婿でも嫁でもとってやる。しかし納得のいかない決断には、たとえ族長といえども従うことはできない」

強烈なまでの自我。それは、不遜ふそんと言い換えてもいい。

たとえ、族長命令であつても従わないと彼女は明言している。それは、いかな族長の娘といえども部族民の一人としてはあまりにも不穏当な宣言ではないか？

それでは、まるで自分の方が、族長に相応しいと言っているように聞こえかねない。

「たしかな事は、草原に一つの風が吹いているという事。父上に

しろ、方向性はあやまっ^ていても、その潮流に乗っ^ているだけなのかもしれない」

「風？」

衍葵は聞いた。

「統合への風。皆がこのままではいけないと思いはじめている。こうして草原の民同士で身内争いをしている現状は、定住民達を富ませるだけで、我々自身の力を悪戯にけずるばかりだと。夷をもつて夷を制す。それこそが奴等のやり口でもある。目下、我々は奴等の手の内で踊らされているというわけだ」

「じゃあ、いまのような部族間の抗争をやめて、協力しあえばいいという事？」

日夏は苦笑する。

「言うは易しだ。草原の者に、話し合いという方法はあまり合^あわぬようだ。相手を叩きのめし、血を流し、流させ、強さの在^あ処を示さぬ事には、なかなか事が運ばぬというのが現実。海のものとも山のものとも分からぬ者に進んで己の部族の権利を渡す道理もない」

「じゃあー」

「東の方に、王を名乗った者がいると聞く」

「王？」

「そう。もつとも螺^ら族とさして変わらぬ規模で、父上などは、己の分もわきまえぬ井の中の蛙よ、と笑っていらしたかな。

だが形は必要だ。族民を鼓舞し、部族をみちびき視野を開く。王

を名乗る事が必ずしも、たわけた事だと、私は思わない」

「その人が、統合を率先するとでも……？」

声には疑い……というより戸惑いが混じっていただろう。どうも話のスケールが大きすぎて、現実感がないというのが本当のところだった。

「どうだかな。確かに今は、井の中の蛙には違いない。カエルが狼に化ける可能性など、そうはあるまいよ。ただ誰かが、視野と力をかねそなえた者が、草原の統合を押し進める事が出来たなら……今は方々に吹き荒れている風を集めて、一つの方向にまとめ上げる事が出来たなら……その向こうにはきっと新しい世界がある。まだ見ぬ、草原の民の国の形」

「それは…草原の覇者という事？」

こんな開けた場所に聞く者がいる筈もなかったが、声を潜めるようにして聞いた。

「いや、もっと——」

そういつて、言葉を切る。

意思的な横顔が、きつかりと地平線を向き、深い黒眼の眼差しが、衍葵の知らない光を帯びて、彼方を見つめていた。

ずっと、同じ時を過ごして来た筈の幼なじみの、初めて見る横顔に、衍葵は魅せられた。

触れる程に近くにあつて、尚こんなにも遠い。どれほど同じ時間を共有しても、どれだけの言葉をかさねても、ただそれだけでは埋まらない何か。

自分と彼女を隔てている何か。それが痛いほどに感ぜられた。

届かない距離と置き去りにされたような感覚。砂をかむような苦さの中から、衍葵自身想像だにしていなかった衝動が芽吹く。

嫉妬ではない、もっと身に迫る、もどかしい、じたばたと諦めの悪い感情。

そんな風になれたら、と。彼女と同じ場所に立ち、同じものを見れたら。同じ視野を共有し、同じ世界で呼吸できたら。

産まれ落ちたばかりの切望に衍葵はとまどい、おののいた。長年の内にしみ付いてしまった負け犬根性が、まだ名前さえない心の動きを、急いで摘み取ってしまおうとする。

分不相応な、馬鹿馬鹿しい願いだ。

それはつまり日夏と肩を並べたいという事だ。

自分のような人間が思うだけでも、おこがましい。第一そんな事を考えた所で、現実是不変。

日夏は皆に慕われる族長の一人娘。人望もあつく才能にも恵まれ、ゆくゆくは部族をおって立つやもしれぬ存在だ。

それに引きかえ自分はどうか。弓さえしぼれない肩輪の少年。部族の日陰者。

比較にも、なりはしない。

「忘れてくれ。ただの夢物語だ。なにしろ我々ときたら、秋の放牧地の確保が最優先事項と来ている。世界はおるか、草原を語れる器でもない。まずは目先の問題を何とかしないと、本当に螺旋族と結婚させられるはめになりかねない。どうせ身売りをするにしても、もう少しましな相手に願いたいものだ」

いつもと同じ屈託のない顔に戻って、日夏は話題を変えた。

「話が脇道にそれてしまったな。今日はお前の晴れ舞台だというのに」

「そんな事は……」

「ああ、そうだ」

そういつて、日夏は首にかかった革ひもをまさぐった。

「これをやる。私が初めて仕留めた狼の牙だ。きつと、お前を守ってくれる」

言われるまでもない。日夏がずっと首にかけていたものだ。

「もらえないよ、そんな大事なもの」

衍葵くんたりが身につけたのでは、その狼も浮かばれまい。

「やると言っているんだ。断るのは失礼というものだぞ。そんなに気がひけるのなら、変わりにお前の成人の儀の獲物の印をくれ。なに、牙の一本や二本が抜けても、贅としての価値はへらないさ」

「そんな……」

「それで、あいこだろう？　せいぜい私の首を飾るに足る獲物を見つくるってくるんだな。鼠の尻尾など引っさげて来た日には、絶交だからな」

衍葵は笑った。今度は素直に笑えた。

「分かった。約束する」

しかし衍葵も日夏も、この時はまだ知る由もなかった。その約束の果たされる事のない事を。

この夜を境にして二人の運命は道をたがえ、再び交わるには、し

ばしの時を要する事となる。

そしてその時には、衍葵にも日夏にも草原にも、今とはまるで異なる風が吹いているという事を、彼等はまだ知らない。

「そろそろ集落に帰ろう。きっと皆が気をもんでいるに違いない」
それをきっかけに会話は打ち切られ、二人は集落へと馬首を向け、馬腹を蹴った。

抜いては抜き返し、返されては抜く内に、次第に競争の様相をていしていく二人と二頭。

夕陽の残照がその様子を照らしだし、赤黒くそまる雲が、はるかにその頭上を流れていた。

第一章 隻腕の少年（後書き）

長い長い第一章をお読みいただき、ありがとうございます。そして
すみません。

以降の章は、大体3000文字から6000文字以内におさまって
いるので、何卒ご容赦のほどを…

（――）m

感想や評価などをいただけると、飛び上がって喜びます。

第二章 成人の儀（1）

集落へと辿り着いた二人を、最初に出迎えたのは薙なぎだった。薙は、衍葵達と同年代の部族の少年である。同じ年頃の間では、日夏に次いで首領格と見なされている。

見るからに不機嫌、というのが第一印象だった。口を開くに至って、それは決定的なものとなる。

「衍葵、お前なに考えてるんだ。よりもよって、今日という日にこんな時間まで戻ってこないなんて」

「ごめん」

謝罪は功を労さなかった。

「謝るくらいなら、最初から無責任な行動をとるな。皆に心配をかけて、日夏を探し行かせて、お前一体何様のつもりだ」

「別に私は誰かに探しにいかせられた訳ではないぞ。自分で رفتんだ」

横合いから口を出す日夏に取り合わず、薙の矛先は衍葵を捉えてぶれない。

「別に、お前が臆して逃げ出そうと、いまさら驚きはしないけどな、日夏をお前の事情に巻き込むのはやめろ」

黙して語らない衍葵を横目に、日夏が代理をかってでた。

「人を勝手に巻き込んでるのはお前の方だぞ、薙。何をそんなに苛立っている？お前の成人の儀でもないというのに」

「…苛立ってなんかいない」

「なら、なんで、そうつつかかる。確かに、人に心配をかけるのは良い事ではないが、ちゃんと大事な時間に戻って来たんだ。そのぐらいにしておけ」

「日夏こそ」ようやく、薙は日夏に対した。「なんで、そう、こいつを庇う。こいつが、日夏にとってなんだって言うんだ。父親同士が、族長とその補佐役だから、こいつにも同じ事を期待してるとでもいうのかよ。こんなっ」

そういつて、人差し指を衍葵に指す。

「弓も射れない、剣も満足に扱えない、臆病者の腕なしに」

衍葵は知っている。薙は日夏を好いている。衍葵が日夏を好いているのとは少々異なる意味合いで。

「腕がないと、どうして臆病者になる？それが、なんで見下す理由になる？第一、身体に障害を背負っているものなら、他にもいるじゃないか。歩けない者、腕が使えなくなった者。それとも、五体が満足していない人間は皆、臆病者の腕なし足なしか？」

違う。と、衍葵は思った。衍葵と彼等では決定的な違いがある。

なぜなら――

「それは、戦いで腕や足をなくした連中の事だろ。勇敢に戦った結果なら、名誉の負傷だ。敬意も表するさ。だが、こいつのは違うだろ」

「なら、生まれつき、あるいは、事故でそうなった者であれば、一片の礼儀も払う必要はなく、思う存分馬鹿にしていいいと？」

「違う！」

薙は叫んだ。

「こいつは、戦えないだけじゃない。戦いたくないんだ。戦う事を怖がっている。問題は、それだ。こいつは、狩りで獲物を狩れない以前に、最初から狩ろうとすらしていない腰抜けだ。心が萎えているんだ。そんな奴が成人の儀？戦士？……そうさ、確かに苛立ってる。こいつが成人の儀を行う事、それ自体が俺達に対する侮辱だ」
薙の舌鋒は鋭く、そして確かに衍葵の一面を的確に言い当てていた。

刀を扱う事は得手ではない。だがそれ以上に振るう事を拒絶している自分がいる。それは、嫌悪と言い換えてもいい。

刃を振り下ろし、肉を裂き、血を大地に滴らせ、生物を死体へと変える。

その仮定に、理屈ではない生理的な嫌悪がわき上がるのだ。それは例えば死んでいく命が哀れだとかいう第三者的な反応ではない。

そもそも、いちいち生き物が可哀想だと思っていたならば、家畜なぞ飼えないし、肉を食べる事すら出来ない。

反応は、もつと第一者的に、非合理に起こるのだ。最近では大分ましになっていたが、七歳ぐらいの頃が一番ひどかった。家畜の屠殺を手伝わされては吐いていたのを覚えている。今でも、無防備な状態で血を見ると反応が起こりそうになる。

自分でもいまいち説明のつかない、それを腰抜けとそしられても、言い返す言葉を衍葵は持たなかった。

「… 薙、大概にしておけ。お前、私を怒らせたいのか？」

日夏は静かにいった。眇^{すが}めた目に針のような光が瞬き、薙は一瞬怯んだ。

そして一瞬といえども、目線一つで怯んだ自分を許すには薙の自尊心は強すぎた。屈辱に顔を歪め、眦^{まなじり}をきつくして、薙は声を荒げた。

「俺の言った事は間違つてなんかいない。みんな言っている事だ。こんな自分の父親にも見限られた片輪に入れ込んでいる日夏の気がしないって」

「おまえ——」

「もういいよ！」

遮ったのは、当事者であつたにも関わらず、ずっと黙っていた衍葵だった。「もういい」と、今度は声を落とす。

「ごめん。薙。僕が悪かった。薙の言うような事を僕自身、考え

ていて、それで少し一人になって、落ち着きたかっただけなんだ。皆に心配をさせて申し訳なく思ってる」

口元に媚びるような笑みさえ浮かべて謝る衍葵に、薙の表情の歪みは微妙に形を変えた。憤怒から冷笑へ。

「心配？」

侮蔑の響きが衍葵の耳朶を打った。

「笑わせる。誰が、お前の心配なんかしている。皆、お前に恥をかかされたくないだけだ。たかだか、成人の儀で怖じ気づかれたりされたら部族の名折れだからな。そんな不祥事が起こらないよう気を揉んでるだけだ」

先程まで衍葵を擁護するような発言を重ねていた日夏も今度は薙と一緒に衍葵の反応を待っていた。

「…うん。分かってる」

薙は冷ややかな軽蔑を含んだ視線で、その答えに報いた。その目が、ふと衍葵の胸の所で止まる。

「それは日夏のじゃないか」

日夏が先程くれた狼の牙だった。服の下に隠しておかなかった事を後悔するのに半瞬とかからなかった。

「なんで……」

「衍葵にやった。成人の儀の祝いに」

日夏が言い終わるのを待たずに、薙の手が衍葵の襟元にかかる。

「それでお前はのうのうと首にぶら下げてると言っ訳か。恥ずかしげもなく、日夏の獲物の印、草原の王、狼の牙を。大した厚顔無恥だ。少しでも恥を知っている人間だったら、到底できない」

息がかかる程かくに、自分を罵倒する人間の顔があった。

絞り上げられた襟に首を圧迫されても、衍葵は抵抗しなかった。抵抗したところで、薙と片腕の自分では勝負にならない事は分かってきっていた。また衍葵は確かに薙が苦手だったが、どうしてか嫌い

にはなれない。

彼の日夏に対する想いも、それで自分みたいな人間に彼女が構うのが許せない、というのも、無理もないと納得できた。好意にしろ悪意にしろ感情を露にして幅からない彼に、どこか魅かれていたのかもしれない。

きっと薙なら他者の悪意と真っ向から向きあい、逆襲する事を躊躇わないだろう。自分の心を蹂躪するものを看過したりはしないだろう。迷わずに自分の正当性と相手の不当とを信じる事ができるだろう。

目を閉じて殴打を覚悟するが、いつまでたっても衝撃は来なかった。目を開けると、薙の拳が、空中で止まっていた。

「…殴る気も失せる。こんな腑抜け」

そういつて薙は衍葵を地面に投げ捨てた。日夏はただ黙ってその様子を見ていただけだった。

「俺はこんな奴、認めない。日夏がどう言おうと俺は絶対に認めない」

まるで宣言のようにそう言っただけを返す。

その背中を見送りながら衍葵は体を起こす。自分を見下ろす日夏と視線が合い、思わずそらした。

「…ごめん」

「なぜ謝る？」

その声は心なしに不機嫌に聞こえた。

「お前は何か悪い事をしたか？あいつにあそこまで言われるような事をしたか？言い返せとは言わない。だが、なぜ謝る？なぜ、あいつの言う事を肯定する？」

顔を合わせられなかった。こんな惨めな姿を彼女に見られなくなかった。

「それは……でも、やっぱり発端は僕だし、何か日夏にかばってもらって、迷惑かけて、だから。それに日夏の獲物の印も、僕が持

つてたら、やっぱり不釣り合いだっと思ってもの、無理はないかなって。薙が怒るのも――」

「仕方がないって？」

更にとがった口調に、衍葵は正真正銘、日夏が怒っている事を知

る。
「つまり、お前が言っているのは、私が、薙があそこまで言われても仕方のない人間に、獲物の印を渡したって事か？」

「そんな事は……」

「なるほど。薙が怒るのも無理はないな」

「ごめん。僕、また何か気に触る事――」

「謝るな！」

びくりと衍葵は黙り、ぎこちない沈黙が流れた。

日夏が何をそこまで怒っているのか分からぬまま、その顔すら見上げる事も出来ず、視線を俯けて、ただ沈黙の終焉を待った。

やがて深い溜め息が頭上に落ちる。

「私の言った事の意味、よく考えてみる。それで、分からないようだったら、その狼の牙を返すなり捨てるなり、お前の好きなようにしたらいい」

鉛のような何かが胸を塞いだ。薙に次いで、日夏までをも怒らせてしまったという事実が衍葵を打ちのめした。日夏がこんな風に自分に怒るのは初めての事だった。だからもう、きつと終わりだと思

った。

とうとう日夏にすら見放された。

恐怖と絶望がぞわぞわと胸の底から這い上がってくる。何かを言わなければならない、口を開くが異物感が喉をふさいで何も出てこなかった。

去っていく日夏の足音を呼び止める事すら出来ぬまま、ただ黙って俯いている事しか出来なかった。

第二章 成人の儀（2）

「光陰、矢の如しとは良く言ったものよ。衍葵も、もう成人の儀を迎える年になったか」

天幕の中を照らすものは、中央に覗く天窓の星明かりと、その下で燃える暖炉の火ばかりだった。

垂れ幕の入り口の間から入ってくる隙間風にあわせて、赤橙の照り返しが天幕の布を踊る。

入り口に正対する位置、つまり上座に座るのは、那伽是の族長、日夏の父親である。その両脇は巫人と、族長の補佐役である衍葵の父親にかためられている。

衍葵は、入り口に最も近くに、彼等に向かい合う形で座っていた。

「今夜は、星も明るく、雲もない。成人の儀にうつてつけの晴天だ。まるで、そなたの門出を祝うようではないか。きっと神山も、そなたに辛くはあたらぬだろう」

「は、はい。いえ、ありがとうございます」

模範解答とは程遠い受け答え。更に、緊張と震えが、その語尾を揺らした。

考え得る限り、最低の応答だった。

額の脇を大粒の汗が一筋、流れ落ちる。天幕の中は、外気より暖かいとはいえ、肌寒いほどであるというのに、自分は頭からつま先までじつとりと汗をかいている。

部族の三長を前に、きちんとした受け答えをしなければと思えば思う程、心は乱れ、声が震えるのだった。自分自身の耳を打つ、あまりの低たらくに衍葵は泣きなくなった。

そして、そんな自分が、彼等に、いや、あの人にどう映っているのか。

それを考える度に狂躁が脳裏をかき回し、舌はもたつき、緊張はいや増す。まさに、悪循環の極みと言えた。

「そう堅くならずとも良い。儂とそなたの父、刹羅とは——」
そういつて、傍らに座る衍葵の父親に目を向ける。

「兄弟同然に育った仲だ。言わば、儂はそなたにとっては叔父も同然。ましてや、お主には、あのじゃじゃ馬娘の相手をさせて、迷惑をかけておる。少しは、相手の事情を考えろとゆうに、聞けば、しよつちゅうお主を危ない事に連れ出していると言うではないか。まったく、あの年頃というのは、思いやりとおせっかいとの判別が出来ておらんで困る」

相手の事情を考える。危ない事に連れ出す。

それらは暗に、衍葵の身体的欠陥を示唆している。先程、薙につけられたばかりの傷が、うずいた。

——みんな、言っている事だ。こんな自分の父親にも見限られた片輪に入れ込んでいる日夏の気がしれないつて。

「日夏は——」

乾いた声が、喉にからむ。自分が今どんな顔をしているのか、痛いほどに分かる。卑屈な、媚びた笑いを浮かべている。

「日夏は、ああいう性格ですから、同情から僕を放っておけないだけなのだと思います」

自分で言っておいて尚、その言葉を衍葵を打ちのめした。

それは自分自身を貶める言葉であつたばかりでなく、日夏との関係性、ひいては彼女の気持ち疑う、裏切る言葉であつたからだ。彼女が耳にしたら、怒り出しかねない類いの言葉であつた。衍葵とて、日夏が同情から自分に接してくれているのだとは思っていないでも、と心の奥で囁く声が聞こえる。

だったら、他に何かあるつていうんだ？日夏が自分にかまってくれる理由、彼女の気を引くに足る、他の何が自分にあるつていうんだ？哀れな肩輪、という他に。

うむ、と族長はどこか満足気にうなずいた。
それで分かった。

言葉と態度は婉曲だが、族長は己の娘であり将来の族長の妻とな

る日夏が、衍葵のような人間に関わっている現状を良くは思っていない。

さらにうがった見方をすれば、衍葵自身がその関係性の中から分不相応な期待をしないよう、増長する事のないよう、釘を指すために衍葵に先の言葉を言わせしめたのだ。

日夏は、同情から衍葵に接してくれている。ただ、それだけの事なのだ。

この天幕にいる誰もが、衍葵の肩輪の訳を知っている。事情を知っている大人達の誰もが黙して語ろうとしない、過去の経緯。彼等はまるで、腫れ物でも触るように衍葵を扱い、膿んだ傷口でも見るように彼から目をそむける。

哀れみと、関わりたくないという心理と、それに伴う罪悪感の交錯する目。

族長の目にも、巫人の目にも、同じ色合いが浮かんでいる。

分かっている。族長は衍葵が憎いわけではない。だが、たとえ衍葵自身に責任があるうがなかるうが、衍葵のような人間に娘を近づけさせたくはないという事なのだろう。

無理もない、と衍葵は自分自身に言い聞かせた。族長様の気持ちは無理もない。理解、出来る。

日夏は、衍葵にとっても大切な存在だ。衍葵のような人間に、たった一人、何のてらいもない笑顔をくれた人間だ。

だからこそ、その真つすぐな視線を曇るのは見たくない。その笑顔がかけるのは見たくない。誰かが彼女をそうさせるのだとしたら、自分はその人間を許さない。それが、たとえ自分であつたとしても、例えば、自分は日夏に甘え過ぎていたのではないかという自省があつた。

彼女が自分に振り向けてくれる明るさがたまらなく心地よかつた。真夏の太陽のように眩しくて、草原の風のように自由な彼女に惹かれた。憧憬の対象に、関心を向けられるというのは、それだけで、己の価値を否定され続けて来た衍葵の欠乏を埋めてくれるようだった。

た。嬉しかった。

彼女と一緒にいると、自分の価値を信じられるような気すらした。だが、知らず知らずの内に、それに縋すがってしまっていたのではな
いか。彼女の価値に縋すがる事で、自分の価値を信じようとした。

だが、そんなものは愚かな錯覚に過ぎない。自分がその価値を認
める他者に近づく事で、そのおこぼれに、あずかるうとしているだ
けだ。

——私の言った事の意味、よく考えてみる。それで、分から
ないようだったら、その狼の牙を返すなり捨てるなり、お前の好き
なようにしたらいい。

分かっている。分かっているんだ、日夏。

君は強くて、真つすぐで、優しいから、僕を見ていて腹ただしく
てならないんだろう？こんな惨めな考え方をする僕が、もどかしく
て君は怒った。僕のために、怒ってくれた。

でも日夏。やっぱり、僕には君の贈り物を受け取る資格はなかつ
たんだって思う。だって、僕が笑うのは、僕が黙っているのは、僕
が従うのは、何も他の人のためなんかじゃない。争いを避けたいの
とも少し違う。

本当に怖いだけなんだ。人の悪意と真つ向から向き合うのが。自
分の内に潜む悪意と向き合うのが。

少なくとも笑ってさえいれば、何を言われても何をされても従順
なフリさえしていれば、相手と、そして自分自身とも向き合わない
で済む。

他者の悪意を対処する最も楽な方法が、それを受け入れる事だと
僕は学んだ。そして、その欺瞞きまんに気付いていて尚、そうし続けるの
は、単に僕がどうしようもなく弱いからなんだ。

向き合えない。向き合いたくない。向き合う意志が最初からない。
自分自身の傷口から目をそむけ続けているのは、他の誰よりも僕
自身だ。

目をそらし続ける。逃げ続ける。今の自分が好きな訳じゃない。

でも、心のどこをどう探しても、立ち上がる気力が沸いてこない。

「では、族長様。そろそろ……」

巫人の声に現実に取り戻される。成人の儀の挨拶は終わりを迎えていた。

「うむ、そうだな。長話をして、夜が明けてしまったでは、話にならぬ」

笑いながらそう言って、族長が立ち上がる。彼にした所で、このように居心地の悪い会話は一刻も早く終わらせるに越した事はなかった。

「しっかりと頑張れよ。衍葵」

「はい。ありがとうございます」

巫人に続いて、立ち上がるうとした衍葵の父親を制したのは族長だった。

「刹羅、慣例により成人の儀の前には、父が子に言葉をかけるものだ」

短く、ただそれのみを言い、背中を見せて入り口の垂れ幕をくぐる族長。それに続いて巫人。残されたのは立ち上がったものの、行き場を無くした衍葵の父親と、顔を伏せて座ったままの衍葵だった。

顔を上げなければと思った。しかし、金縛りにあったように、体が動かない。

声をかけなければ。でも何て呼べばいい？ 他の者のように、刹羅様と？ いや、いくらなんでも父子が二人きりの時にそれではあまり他人行儀で白々しい。

では、昔のように『父さん』と？

自分がその呼び掛けを最後に使ったのは、一体いつだったのだろうか？ 同じだけの時間、父親とは話をしていない。同じ集落に暮らし顔を合わせぬわけでもないのに、お互いに相手をいないものとして扱った。

いつも衍葵が遠目にしか見る事のない父親の姿は、四十前半という年齢とは思えぬほどに壮健で、いまだ衰えを見せぬ武技は、部族の若い戦士達から、部族一の戦士の称号を守りぬいていた。

引き結ばれた唇、感情をあらわさない鋭い黒眼、ひいでた額と、すぐな鼻梁、体格にめぐまれた威風堂々とした佇まいは、若い頃のままだと人はいいい、ただ目元の皺と白いものの混じり始めた頭髮だけが、わずかに老いを忍ばせている。

見た目も中身も、こうまで似ていない父子というのも珍しいとよく言われた。自分でも、よくもここまで正反対の父子がいうものだと関心するくらいであった。

混血の衍葵の容貌は、母親から受け継いだ繊細な造作と淡い色彩を基調とし、骨格にも筋肉にも恵まれていない成長途上の体は一見して同年代の少女と目立った違いはなかった。たとえ右腕を無くしていなかったとしても、同年代の部族の少年に伍する事が出来たかどうかは疑わしい。

刹羅の息子である、という事実も、衍葵の非力と弱気を一層際立たせこそすれ、その逆は望めなかった。

もとより衍葵は数いる刹羅の息子の中の一人、しかも混血で妾腹であるという事に加えて、出来損ないの息子だった。他の異母兄弟達も衍葵を同等とは見ず、刹羅の衍葵に対する態度にならった。

唯一、衍葵をまともに扱ったのが血の繋がりなどないに等しい日夏であり、ひつきょう血が濃ければ濃いほど遠いという反比例の構図だった。

目の前にいる人間は、衍葵とはもつとも血縁的に近い存在でありながら、誰よりも遠い存在だった。無視という行為で衍葵を否定し、衍葵の今を形作った人間だった。

だから期待していたわけではない。ただ、この気まずい沈黙を一刻も早く終わらせたかっただけなのだ。そう自分自身に言い聞かせ

た。いまさら何を期待している訳ではないのだと。

「……父さん」

声はやはり震えていた。しかしそれでも何とか顔を上げ、自分を見下ろす父親の目と十年振りに対峙した。

光を吸い込むようなその黒眼が微妙に揺らいだように見えたのは、目の錯覚だっただろうか？

「父さん、僕は――」

「衍葵」

父親は、衍葵の言葉を半ばでさえぎり、切り捨てた。

「私に恥をかかせるな」

衍葵は唇をとざし、噛みしめた。再び、顔をそらし視線をふせる。その隣を刹羅は通りすぎ、天幕を出ていった。

第二章 成人の儀 (3)

山は湿った匂いがした。

乾いた草原にはない湿った土草の匂いだった。

生い茂る植生も、鬱蒼とした緑も、神山と呼ばれるに相応しく、この乾いた大地の上で何故ここだけかと思わずには置かないように、生命の脈わいを育んでいる。夜の闇の中でも、生命の営みは木々のざわめきの間に、枯れ葉を掻き分ける小さな気配の中に感じられた。

神山に入って、まだ一刻にも見たなかったが、衍葵は額の汗を拭いて、息をついた。

手近な木の根に腰を下ろし、左腕で刀を抜いた。咄嗟の時に刀を迅速に抜けない片腕の自分としては、裸のまま持ち歩いていた方がいいように思えたからだ。

たわむれに満月に掲げてみると、銀の光がきらきらと刃先にそって落ちていく。

よく使い込まれた一品だったが、その用途はこれまで、なたの域を出た事がなく、果たして今日という日が、ただの一回も生き血を吸った事のないこの愛刀の初めての夜になるかは、疑わしかった。

—— 鼠の尻尾など引っさげてきた日には、絶交だからな。

そう言った日夏を思い出す。笑おうとしたが、途中、唇が奇妙な形にねじれて止まってしまった。

あんな形で別れたまま、成人の儀に赴くというのは心残りだったが、彼女とは話をする時間も機会もなかった。

慣例では成人の儀の前の見送りは禁じられている。成人の儀の試練の主旨は、あくまでも一人で成し遂げると言う事であり、神山に赴く時もたった一人ひっそりと立たなければならない。同道を許さ

れるのは馬一頭、それも神山につくまでの話であり、山に入る時には本当に一人になるのだった。

それに、正直なところ、こうなって少しほっとしている自分がいた。いま日夏と顔を合わせるのは、まだ少しきつい。

今度こそ、失望をつきつけられるかもしれないと心がざわつく。そしてまた、そうなった時、平静を装える自信は、今夜ばかりは怪しいのだった。

——私に恥をかかせるな。

父を憎いと思った事はない。薄情だとも。嫌いだとも。

父親を目にする度に、心を浸食する、あの感覚に名前をつけた事はない。

ひとたび名前をつければ、その感情は根を張り、葉を生い茂らせ、自分自身、制御できないまでに成長していくような気がした。定義する事はすなわち、認める事であり、自分の内にそれを根付かせる事だった。

あるいは、そうするべきであつたかもしれない。求めても得られぬものに拘泥してより深く自分を傷つけるよりは、いつそ己の一部ごと、決り取ってしまった方が痛手は少なかったかもしれない。

だが、そうする事によって、自分は今まで曖昧なままにする事によって守られて来た某かのものを失う。自分を構成し、支えて来た何かを切り捨てる事になるだろう。たとえ、それが——

（どれほど愚かしい願いだったとしても）

心を搦めとろうとする、どす黒い触手から逃れようと、衍葵は刀を握りしめた。感情の残滓を払い落とすように立ち上がり、歩き出す。

まずは、動物の足跡が残っているような真新しい獣道を探さねばならない。

その後はその足跡上に、自分の背丈とそう変わらないくらいの、

細く、しなやかな若木を見つける。あるいは適当な高さにある枝で
もいい。

ひとたび適当な場所を見つけたならば、後は自分の懷に忍ばせて
ある紐と少しばかりの運が何とかしてくれる。

もともと儀式の時を除いて神山は禁足地ゆえに、人の手に乱され
る事のない動植物の天地である。獲物は多い。時間はたっぷりとあ
る。心配する事は何もない。そう、今は気を落ち着かせ、やるべき
事をやらねばならない。

歩きまわる事しばらく、衍葵は目的に適う場所を見つけた。彼は
その場に膝をつき、あらかじめ、腰帶を割いてつくった紐で輪を形
づくった。その輪を丁度、小動物の頭に合うぐらいの形に整え、周
囲の低木を支えに輪を地面より少し上に固定する。

結び目のない輪である。片側に作った小さな輪つかにもう片方を
通したもので、先に輪のついた投げ縄のような形をしている。そし
て、投げ縄であれば持ち手に当たる部分は、曲げられた柔軟な若木
の先に結びつけられていた。

片腕とは思えない器用さで、衍葵は一連を作業を終えた。

つまり、獲物がその輪を通り抜けようとして、頭を差し込んだ時
点で、少しの負荷で外れるように固定しておいた若木は跳ね上がり、
その張力によって紐は引き絞られ、輪が閉じて、哀れな小動物の首
を締め、宙釣りにするという工夫である。

薙であれば、姑息と糺弾しそうなり方だったが、弓を引けない
片腕の自分が山月刀を手に、なんにち山をかけずり回った所で鼠一
匹捕まるかどうか心許ない。

また、成人の儀に携行する武器に特別な制限はなく、あらかじめ
用意しておいた紐の一本や二本が掟に抵触するとは思えない。それ
に、この成人の儀自体を、通過儀礼以上のものとは捉えていない衍
葵にとって、とりあえず周囲の面目が立てばそれでいいのであり、

戦士らしいからしくないかは二の次の問題であった。

どのみち、自分に儀式を滞りなく終える以上の事は期待していない者達が、それを持って無効を叫ぶとも思えない。姑息だ、卑怯だ、くらいの陰口は甘んじて受けるつもりだった。

周囲に同じ様な罨を周辺に幾つか仕掛け、後は待つばかりとなった時だった。

最初は気のせいかと思った。だが、地面に耳を押しあてて、本当に地面が振動しているのだと気付く。立ち上がるころには、振動はもはや微弱ではなくなっていた。

山は、いまやはつきりと振動していた。地鳴りに混じって、鳥の羽ばたき、動物のいななき、大小無数の足音がまたたくまに大きくなり、やがては耳を聳するばかりとなった。

(…地震?)

足の間を通り抜ける鼠や兎達の群に目を見張り、その一匹が自作の罨にかかって跳ね上げられるのを尻目に、呆然と衍葵は立ち尽くしていた。

逃げなければ、と思った。山を降りて、麓に繋いである馬を放して、それから――

ふいに光が視界を覆った。

続いて、全ての物音を圧する轟音が耳を塞いだ。爆風で衍葵の体は吹っ飛び、木の幹に叩きつけられて、その根元に落ちた。

一瞬、気を失っていたように思う。体中を襲う猛烈な痛みが、衍葵の意識を引き戻した。

口腔に溢れる、ぬるりとした感触。

全ての音を無くした世界がゆっくりと元に戻るにつれて、衍葵は自分の口から漏れ出る、異様な呼吸音を聞いた。ゼーヒーと、まるで気管支に穴でも開いたかのような音で、暫く自分のものとは信じられなかった。

口は陸に上がった魚のように必死と開閉を続けているのだが、空気が一向に流れ込んでこないのだ。肺が握りつぶされたように、呼吸が出来なかった。

火がついたように熱いのは肺ばかりではなく、五臓六腑の内の幾つかはまぎれも無く損傷を受けていた。

喉をこみ上げてくる異物感に、仰向けの衍葵は咄嗟に顔を横にして咳き込んだ。

体が意志の力とは無関係に傾ぎ、すぐ隣の地面に赤黒い塊を吐いた。ぬめりを帯びたその塊は、明かりに照らし出されて、ちらちらと光の縞をひらめかせていた。

血。

ぞわりと不快な感覚が鎌首をもたげる。吐き気が再び喉を塞ぎ、衍葵は血の混じった胃の内容物を辺りにまき散らした。

むせかえるような血の匂いに、過去の記憶が蘇りそうになり、耐えられず顔をそむけた。

そむけた先にも、やはり赤があった。

赤い、照り返し。満月の月明かりの中にあっても、その照り返しは不釣り合いなほど明るかった。

森が燃えている、と気付くのに少しばかり時間がかかった。至近距離に結ばれていた焦点を、ゆっくりとその背後に移す。黒い影絵と化した木々の向こうに、赤い色が見えた。

揺らぎ、踊り、爆ぜる、赤。

ぱちぱちと音を立てて、一切を呑み込んで膨張していく炎は、空を焦がし、衍葵と五十歩と離れていない場所で猛威を振るっていた。

立ち上がろうとするが、四肢に力が入らない。なんとか四つん這いならぬ三つん這いになり、最寄りの木に背を預けた。

それだけの事をするのに、体の内部が尋常ならざる痛みを訴え、衍葵は三度、血を吐いた。吐き出した鮮血は、今度は顔をそむける事もかなわず、そのまま胸を汚した。

(…僕は、ここで死ぬのか?)

独白のような問いが、霞がかった意識に問いかけた。何が起ったのか、どうしてこうなったのか、その原因も理由も分からぬまま、血と吐瀉物に塗れて、だれにも看取られる事なく、一人、死んでいくのだろうか?

いまだ何を成し遂げたわけでもなく、また成し遂げたかった何があるわけでもない。

ただ息をひそめて生きてきた十五年間。それが今、唐突に終わりを迎えようとしている。

気紛れに踏みつぶされた虫にも等しい、その生と同様あまりにも、ちっぽけな死。その生の証も死の証も、あまりにも、ばやけて頼りない。

自分の生の足跡はここで途切れ、時の風化に瞬く間に呑み込まれていくだろう。誰の心にも残る事はない。

あるいは、日夏なら、悼んでくれるだろうか? いつきくの涙をたむけ、心の片隅に衍葵の記憶を残してくれるだろうか?

風いでいく恐怖の代わりに、虚無が広がっていく。痛みに混じって倦怠が四肢を痺れさせていく。体から止めどもなく、流れ出していく何かを見つめながら、衍葵は自分自身がどんどん空っぽになっていく気がした。

視界の中で赤い色が滲んで、自分が泣いているのだと知った。

まだ体に残っている僅かな体力をかき集めて、衍葵は胸をまさぐった。血に濡れた服の上から、震える指がその感触を探りあて、握

りしめる。

彼女の顔を思い浮かべようとするが、どうしてか浮かんでくるのは彼女の背中ばかりだった。自分を置き去りにして、去っていく。その、足音。

それで分からないようなら、と彼女は言う。

それで、分からないようだったら――

何かを言わなければと思い口を開くが、異物感が喉をふさいで何も出てこなかった。去っていく日夏の足音を、呼び止める事すら出来ぬまま、ただ黙って俯いている事しか出来ない。

「――無様だな」

その声が日夏の後姿を闇に溶かし、衍葵を再び炎に呑み込まれゆく神山に戻した。

第三章 異形 (1) (前書き)

注意： この章は、一部、残酷な表現を含みます。

第三章 異形 (1)

「無様だな」

目を明けると、そこはまだ、火の粉の舞い散る森の中で、血と吐瀉物に塗れながら、木の幹に背をもたれかけさせている自分がいた。

「その姿でなお、その様か。こちらはまだ形態さえ換えておらぬというのに」

再び同じ声が耳朵を打ち、衍葵は声の主を求めて視線をさまよわせた。その少女のような高い声と、冷やかな抑揚が、ひどく不釣り合いな声の主を。

そうするうちに、やがて、視界の内にそれを見つけた。なぜ、今まで気付かなかったのかは分からない。

先程の爆風の震源地とおぼしき開けた場所が、木々をなぎ倒した後に出来ていた。そこだけ決り取ったように無惨に地肌を晒した地面の上に立つ、二つの影。

一人と、そして一体。

その一体は、人ではなく、獣でもなかった。化物としか形容できない姿がそこにあった。

猿とも狼ともつかない輪郭。有に馬の三倍以上はある巨体。その右半身は、赤黒い長毛を引きずり、その左半身は爬虫類然とした鱗に覆われている。頭部の顔半分は狼に良く似ていたが、片目は潰れ、たった一つ残された目は、血を塗り込めたような赤だった。

その背骨にそって隆起する連なりは、ある場所では角のようであり、またある場所では肉腫こしゅのようでもあり、不揃いな列をなして、腰から頭へ、頭から鼻の頭まで伸びていた。

折れてひしやげた翼は、蝙蝠の羽と鳥の翼を掛け合わせたようで

あり、実際ある場所は羽毛をはやし、他の場所は、黒い被膜に覆われていた。

それは部分部分だけ取ってみれば何かに似ているが、衍葵の知る如何なる動物とも相容れない生き物だった。

左と右と、大きさも形も違う非対称の造形は、まるで無作為に生き物の部分を継ぎ合わせた、寄木細工のようだった。

しかし、その神に呪われたとしかいいようのない異様にも関わらず、件の生き物は、ひどく傷つき、死にかけているように見えた。四肢を踏みしめて立つてはいるものの、その牙の隙間から漏れ出る荒い呼吸音は不規則であり、その口腔から溢れ出る血泡が涎となつて、止め処もなく地面をつたっていた。最初は赤と黒の斑のように見えていた体色も、肉を露出した傷口と流血が、漆黒の体を斑に染め上げているに過ぎないようだった。

そして、その生き物が、牙を剥き出して対峙する相手は人間の少女。少なくとも外見は、そう見える相手だった。

「みずから仕掛けてくるからには、よほど自信があるつかと期待していたのだが、この程度とは。興冷めだ」

先刻からの声の主は、その少女のようだった。

燎原に浮かびたつ、小さく、か細い立像は、異形の巨体に比べていかにも頼りない。

しかし、やはり、この少女もただの少女であろう筈がなかった。

風に煽られ、吹きすさぶ火の粉を纏う少女の髪は、老婆のような白髪であり、その皮膚も色白などという形容を通り越した、色素という色素を抜き取ったような白さだった。そして、その瞳は化物と同じ真紅。

白子。

実物を見るのは初めてだったが、話には幾度か聞いた事があつた。色素を持たずに生まれ、光に弱く、赤い目を持つ動物や人間達。風習によつては彼等を忌子とし、その赤眼を邪眼と見なす。またある所では、白子は神の使いとされ、畏れられているとも。

集落に立ち寄る商人達から仕入れた知識だつた。もつとも、その内の一人に言わせるところ、白子はただの先天的な病氣であり、体も弱く、長くは生きられない哀れな生き物に過ぎないのだと言う。

しかし、とその商人が続けて言つた言葉が耳に蘇る。

——縁起が悪いっていう気持ちも分からんじゃない。赤い色は血の色。そんな色を瞳に宿したものは、どうしたつて禍を呼び寄せるのかもしれない。

だとしたら、自分の死も、また彼等によつて呼び寄せられたのだろうか？

そうだとすると、どうして彼等は三十歩と離れていない場所にいる自分を無視しているのだろうか？気付いていないのか、気付いていて路傍の石のごとく気にもとめていないのか。

案外、後者かも知れないと思つて、衍葵は表情もなく笑つた。

考えてみれば、この山で死にかけている生物は自分だけとも思えない。この、炎だ。無数の山の命たちが、今この瞬間も、叫び、いなき、もだえ苦しみながら、その命の灯心の最後の一欠けらを燃やしていることだろう。

その中であつて、どうして自分の生の瞬きばかりが他よりも明るいことがあるだろう？

火に煽られた羽虫と、自分と、この山火事の前では等しく無力には違いない。

いずれにせよ、それを知るための時間が残されているとも、思えなかつた。

先ほどから随分、彼等の声も姿も不明瞭になってきている。もしかしたら、姿も形も違う二対の赤目は、死に際して自分が生み出した幻影なのかもしれないとさえ思う。

瞼が、重い。

「それにしても、随分な姿だな」

少女の声だ。紛れもない愉悦が、冷やかな語尾を揺らす。どうしてだろう、と衍葵は白濁した思考の裡で思う。少女の声は玲瓏として美しいのに、ざらついた余韻を聞く者の耳に残す。

「小物大物を問わずに、手当たり次第に喰い散らかしたか。元がどんな形をしていたのか、まるで分からなくなっているではないか。そうなるまでに一体、何体喰らった？」

からかうようにそう言った少女に対して、化物は低く呻いた。

『貴様ヲ』

血泡を吐き出す狼の口腔の奥から、くぐもった音節が一言一言、吐き出される。それは、聞き取りにくいものの衍葵にも理解できる言葉だった。

『貴様ヲ、殺スタメニ、必要ナダケダ』

少女は嗤った。

「不十分だったようだな」

『マダ、マダダ。終ラナイ。マダ——』

異形が前足が力を蓄え、踏み切ろうとした、正にその瞬間。

「いや、終っているよ」

赤い血しぶきと共に、異形の前肢が宙を舞った。

重々しい落下音がそれに続く。前肢を失った異形は、地面に崩れ落ちた音だった。

少女は瞬時に二十歩の距離を縮めて、異形の懐にあった。残像すら捉えられない、消えて現れたとしかいいようがない動きだった。

「ふむ」と少女は一人ごちる。「前肢で急所を庇ったか？それとも、ひよっとして反撃しようとしたのか？」

そう言つて左腕についた血糊を、振つて払う。

いや、それは、もはや腕と呼べるべきものではなかった。少女の腕だったものは、いまや、まるで別の物体に成り果てていた。

少女の右肩より先の部分は、骨格が歪み、変形し、膨れ上がり、鎌のような形状をかたどっている。

歪な鎌の反りの内側に連なる数々の突起は、瘤のようでもあり、動物の爪のようでもあり、丁度、その足下に倒れる化物の異形に通じるものがあつた。

なんであれ、その物体が、化物の前肢を切断したのだということとは間違いなかった。

押し殺した嗚咽が三足となった異形から漏れる。失われた前脚を取り戻そうとでもするように、残された肢が地面の上をもがく。

異形は―――衍葵は、その腕に向かつて手を伸ばす。そうすれば、欠けた四肢の一部を取り戻せるともいうように。

斬撃で飛ばされた体の一部は少し離れた場所に落ちていた。切り離され、たった一本、地面にとり残されたそれは、ひどく作り物めいて見えた。

かつては自分の体の一部であつたことが嘘であるかのように、切断された腕は、他人行儀でそこに鎮座している。あがき、のた打ち回る、かつての主人を嘲笑うように。

肩と腕、本体と右腕、両方の切断面からどくと溢れ出す血だが、かろうじて、かつて二つが一つであつた名残をとどめている。

しかし、いつしか血は止まり、切断面は肉腫に変わる。それでも体は失われた一部の記憶を忘れられないのだ。

動かそうとするたび、触れようとするたびに、行き場を無くす生

々しい感触。左手は、むなしく宙を掴むばかりで、もどかしさに気が狂いそうになる。

手の届かない痒み。実体を伴わない痛み。それは、錯覚なのだと己に言い聞かせる。

感覚を訴えるべき実体は、もうすでにそこにはないのだから、痛むはずもない。だから、錯覚なのだと、言い聞かせ続ける。

ますます、きつく掌の中のを握り締める。もうそこに何が納まっているのか思い出せなかったが、そうする事で少しでも救われないと願った。

救済を求めていた。

身近に迫った死の手触りの中、恐怖よりも深い諦観が心身を凍えさせる。

うろのように底の見えない空白が、先刻から自分を覗き込んでいるのを感じている。それが何かひどく怖ろしいものだと感じているのに、それでも尚、生きたいと、何に変えても生きたいと、願えない自分がいて、その事が切実に悲しく、やるせなかった。

だから救われたいと願った。底冷えのするような空白のうろが、その最後の願いすら呑み込むまで。

むせかえるような血の匂いに、今はもう心は波立たない。

死に行く自分の目前で繰り広げられる一幕はいつたい何なのか、自分が何故死んでいくのか、死ななければならぬのか、それすらも、もう、どうでもいい事のように思えた。

重い倦怠感が思考を蝕む。

苦痛はもう大分引いた。やがて、全てなくなるだろう。

第三章 異形 (2) (前書き)

注意：この章は、残酷な描写を含みますので、苦手な方はご注意ください。

第三章 異形 (2)

「どんな気分だ？」

少女はそう言って、鎌と化した右手で、異形の頭部をこづいて自身に向けさせた。己と同色の瞳の中に、押し殺した苦痛と、いまだ衰えぬ憎悪を見出し、少女は満足気に微笑む。

「私を殺すために、生きて来たのだろう？己が同族を喰らい、憎んでやまない私と同じものに成り下がってまで、殺したかったのだろう？その全てが、徒労に終わると分かった今、どんな気分がする？」

異形は、答えなかった。答えられないのかもしれないなかった。

残った四肢を地面に投げ出したまま、ただ滾るような赤眼だけで、少女を睨みかえす。

「それどころか、お前は、これから私に喰われる定めだ。滑稽じゃないか？お前の怒りも、憎しみも、私を倒したいという一念も、まるで全て、私の糧となるためにあつたかのように」

尚も起き上がろうと残った四肢をもがらせる異形を眼下に睥睨する。^{へいげい}

「安心するがいい。すぐには喰わない」

そう言つと、少女は、鎌と化した右腕を構えて、足下の異形に振り向けた。

「最初は、右前脚だったな。次はどこがいい？…ああ、答える体力も残っていないか」

ざくり、と刃が肉に食い込む音。

無抵抗の獲物を相手に、少女は、躊躇なく刃を振るい、切り刻んでいった。

一本、

二本、

三本。

足が一本切り離される度に、新しい血が吹き上げ、地面を黒く染めていった。全てが終わった後、異形は達磨と化して己の血溜まりの中に横たわっていた。

少女は、笑みさえ浮かべて、その惨状を見下ろした。

「これはいい。四肢をもがれてしまえば、どんな異形も芋虫と変わらない」

異形の赤眼は、もはや焦点を結んでいなかった。つま先で、軽く小突いても、それは変わらない。少女は小首をかしげる。

「つまらないな、もう終わるか」

本当につまらなさそうに、そう呟いて、肩をすくめる。

その様子だけ見れば、いつそあけないといってもいいほどで、それがかえって、情景のむごたらしさに拍車をかけていた。

「では、そろそろ、いただくとしよう」

少女は膝をつき、異形の胸部に刃と化した右腕を差し込んだ。

肉を切り裂き、掻き開き、その内部をまさぐる右腕の動きに呼応して、異形の体がびくびくと痙攣し、その牙の合間から断末魔の慟哭が漏れ出る。

押さえた、悲痛な悲鳴。命を奪われるものの叫びだった。

「なんだ。まだ声を上げる気力は残っていたか」

血塗れの少女の異形の右腕が、引きずり出した、異形の胸部に埋まっていた何か。それは、瑪瑙のような斑な色合いの、淡い光を放つ玉だった。

しかし、無機質な外観にそぐわず、びくんびくん、とまるで何かの臓器のように少女の手の中で脈打っている。

脈動の度に揺れては散る燐光。角度によって色を換える人間の心臓ほどの大きさのそれを、少女は炎に、ためつがえすして眺める。

「つい先程、喰い殺したこの山の主よりは、いささか上等と見える」

そう感想を述べると、少女は、それを握り込み、握りつぶした。すると、その玉は、個体から液体に、果てには気化するように、少女の掌に握りつぶされて吸い込まれた。やがて最後の燐光が消え、少女は足下で悶絶する異形に視線をもどす。

血のように赤い唇がねじれて、言葉を吐いた。

「ごちそうさま」

異形は、もはや悲鳴を上げること、頭部をあげることも適わぬまま、胴体と首だけになった姿を、無残にさらしていた。

少女は、その様子をしばらく観察し、つと声を上げる。

「ああ、忘れていた。まだ、一本残ってるじゃないか」

いつが早いか、異形の太い首に、鎌が埋まり、そのまま掻ききられた。

ひと際高く上がった血飛沫が、少女の白い体を赤く染め上げた。

彼女は膝を折り、離れた首と胴に向かつて囁く。

「どうだ？痛いだろう？悔しいだろう？死んでも死に切れない気分だろう？だが、お前は、ここで死ぬんだ。命に代えてもなしたかった復讐をなせぬまま、ここで無念に震えて朽ち果てるがいい。その最後の瞬間まで己の非力を呪いながら」

その瞬間だった。

胴と切り離された、異形の首が飛び、少女の半身に喰らいついたのは。

肉を裂き、骨を砕く異音。

爆ぜる炎の中に、血の匂いがひと際濃く香った。少女の体がかしぎ、異形の首ともつれ合って、血の海に倒れて、転がった。

「……っつ」

荒い呼吸音と共に相手の体を押しつけて、立ち上がったのは、肩ごと腕を持っていかれた少女だった。

いまや体中を朱に染め変えた白子の少女は苦痛に顔を歪ませて、狼の首を足で踏みつけた。

「……やってくれるものだ。心の臓を抉り出し、首を切り離してもまだ動くのが、畜生の畜生たる由縁だったな。最後の力を温存して機会を伺っていたのか、それとも本能の賜物か。いずれにせよ、もはや支えられぬ胴とあらば身重なだけ。切り離せば首もよく飛び、牙も早くなろうというもの、か。少々遊び過ぎた……だが」

少女は、異形の首を踏みつける足に力を込めた。

まだひくついていた異形の頭部が歪み、音を立てて潰れる。半壊して飛んだ肉片があちらこちらに散って、惨劇の最終章を飾った。

「私の勝ちだ」

喘ぐようにそっぴいなながらも、残された少女の左腕は形態を換えていった。

人間の手から翼の形へ。昆虫のような鳥のような蝙蝠のような歪な翼は、二度三度羽ばたき、血を地面に叩きつけるようにしながら、揚力を得て宙に浮かび上がった。

やがて安定感を欠いた軌道ながらも、その姿は赤く焦げる空の向こうに消えた。

後に残されたのは、ばらばらに放り出され、いちじるしく損壊した四肢と首と胴、それに二体の異形の血が混じり合った地面だけだった。

第三章 異形 (3)

そこには闇があつた。

瞼を閉じて出来る闇よりも、深く凝つた、常闇だつた。奥行きも広がりも、全てが一樣の闇に同化し、狭いのか広いのかさえ分からない。わずかに知覚できる己の輪郭すら、端からさらさらと流れていく。

音もなく、耳の切れるような静寂の中を、連綿と、つたい落ちていくものがある。握りしめた一握の砂にも似て、一粒一粒、指の間にその存在の軌跡を宿らせては、こぼれ落ちていく。

時にそれは、もう思い出せない誰かの笑顔であり、並んで眺めた夕焼けであつた。

馬上にあつて感じた風と、馬の背から伝わってくる振動と躍動であつた。

振り仰いだ空の青さと、雲の白さであつた。

身を斬るような清澄な朝の大气であり、せせらぎに差し入れた手の冷たさであり、天窓から覗く星々であつた。

眠れない夜と、頭の中で繰り返した独白と、染み入るような冷めた夜の大气であつた。

それらは、過去から蘇り、再生される側から闇に落ちて、消えていく。束の間の追憶を点々と宿らせては、流れ去っていく。

(… 思い出せ)

新しい記憶もあれば、古い記憶もあつた。優しい記憶もあれば、そうでないものもあつた。

誰かが言つた。お前は臆病者だと。
もう一人が言つた。腕なし、と。

更にもう一人が、背中を押した。咄嗟に利き腕だった右手をつこうとして、顔から地面に落ちた。頭上で、笑い声が沸いた。

（そうだ。思い出せ）

背中に馬乗りになられ、左腕を拘束され、右の袖をちぎり取られた。二の腕の中程までしかない右腕の切断面が外気に晒される。肉が盛り上がり、先のすばまった切断面。彼等は、それを眺め、あるいは興味本位で触り、口々に何かを言って、笑い合った。

（…憎い）

誰かが肩を抱き、手をさしのべた。見覚えのある女性。でも、誰かは分らない。大丈夫、と彼女は問う。その瞳にある、憐憫。顔を伏せると彼女は、それを封じるように覗き込んだ。

泣いているの？泣いているのね。泣いていないと答えても彼女は入れなかった。可哀想に、と重なる。

可哀想な子。

（憎い、はずだ）

さらさら、とこぼれ落ちていく。

もはや名前の分からなくなった人たちが、入れ替わり立ち代わり自分の前に表れては、去っていく。笑い、怒鳴り、慰め、嘲り、諦めては通り過ぎていく。

（お前を傷つけた奴等。馬鹿にした奴等。哀れみ、見下した奴等。そう、お前は許してなどいなかった）

だが、それも直に終る。悔しさも痛みも、ほの暗い虚無に喰われて消えていく。一つ、また、一つと。離れていく。

（いいや。それでも、消えない記憶はある。消せない記憶がある。望もうが望むまいが、消しようのないものがある。お前は忘れて等いない。思い出せ）

――古い、古い記憶の中に、叫びがあった。

（そうだ、それでいい）

優しい人肌の温もりと、鋼鉄の刃の感触と、焼けるような熱さと、溢れて伝う生暖かい液体と、斬って捨てられた腕があった。悲鳴があり、恐怖があり、痛みがあった。

焼け付く痛みの底から、もつれ合った感情が幾重にも折り重なり、精製され、一つの理解が産まれた。

心の奥深い場所に封じ込め、重い掛けがねをかけて、忘れようとした。

誰の目にも触れさせず、意識を向ける事すら己に禁じて、時の風化を待った。だが、日の光の届かない、空気の流れの停滞したその場所に、風化などありようもなかった。扉を叩き、掛けがねを揺らすその音は、押し込めれば押し込める程、日々大きくなっていくようだった。

（己を偽ってえた仮初の平安に、安息があるはずがない）

だが、その音に耳を塞ぎ、怯えた日々も、直に終るだろう。消えてなくなる。深い深い闇の淵に塗り込められたまま、他の全てと同じ、闇に帰る。

（いいや、消えてなくならない。なくなつて、たまるか）

だが、それで解放される。ようやく、楽になれる。

（楽になど、なれるはずがない。お前が認めようと認めまいと、それは、そこに存在する。消えてなくなりなどしない。その痛みは本物だ。見る。放置され、膿ただれ、腐臭すら放つ、傷口がそこにある。癒されない。癒される事などない。未来永劫。その根源を立つまでは）

それでも。

（お前が感じた痛みを、悲しみを、憎しみを、全てなかった事にしようというのか？）

それで、誰もこれ以上、傷つかずにすむのなら。

（傷つくだと？誰が傷つく？）

誰もが。

望んでいない。目をそむける。知っている者も、口にする事はな

い。だから、口にしない。だから、忘れる。覚えていない振りを。

（違う。お前はただ自分が傷つくのが怖いだけだ）

その通りかもしれない。もう、これ以上、傷つきたくない。覚えていない振りを続けるのは、苦しかった。

だから、もう、楽になりたい。人から笑われるのも、馬鹿にされるのも、本当は平気じゃなかった。笑われる度、指を刺される度、笑顔を作ろうとする度に、心のどこかが、きしみを立てる。その音は鈍く小さく、でもそれを聞くたびに、自分の中で一つまた一つと何かが壊れていくような気がした。

だから、もう楽になりたいと願うのはそんなにいけない事だろうか？

（逃げ続け、目を背け続ける事で楽なれる筈がない。お前は、一切の痛みを自分の内に呑み込んだ。他の誰でもない、その傷を自分に負わせた奴のために。お前を糞のように扱った連中のために。何よりも、そうする事しか出来ない哀れなお前自身のために。だが思い出せ。それは誰の痛みだった？決して、お前だけのものではなかったはずだ）

自分だけのもの、じゃない？

（流された血を、思い出せ）

血。

赤い、血。

あれは誰の血だった？乾いた大地に染みこんでいく、黒く広がっていく。あれは誰の血だった？あれは、僕のものだった。違う。あれは…

（お前は、忘れられるのか？）

人肌の温もり。ぬるりと薫う血の感触。鼻先に揺れる淡い色の髪。金木犀の香りがする、柔らかい体。

どれだけ呼んでも、泣きじゃくっても返事はない。抱きしめても、

取りすがつても、掌の下で次第に固くなっていく、あれは。

（許せるのか？）

母さん。

（そうだ）

母さんを、殺した。

（その通りだ）

父さんが、母さんを。

（そうだ。忘れられるはずがない）

父さんが、母さんを――

（解き放て）

殺した。

常闇の世界にひびが入る。

闇にかえった、闇にかえろうとしていた数多の記憶が、蘇り、集まり、膨れ上がる。幾度となく繰り返し再生されるそれ等の記憶達が、五感の上をかけずり回り、再び衍葵という輪郭を形作る。

そして闇が弾けた。

涙にぼやけた視界が、もう一度、世界を映す。頬を焦がす熱風と、煙と、むせ返るような血の臭い。

そこには崩れかけた異形の首があった。

（生きたいか？）

それは、聞いた。

第三章 異形 (4)

北西の空が燃えていた。空を焦がす炎に、馬はいななき、異変を察知して天幕から飛び出して来た人々で、集落は昼のごとき喧噪に包まれていた。

「あれは、神山の方角じゃないのか」

「集落の外にいる家畜は大丈夫なのか」

「そなた、神山が」

「族長様は、どこだ!？」

立ち尽くし、あるいは右往左往するばかりの彼等の視線は、頼るべき人間の姿を探して、人波の間を縫って急ぎ足に向かってくる族長の一人娘の元に集まった。

彼女もまた、変事に寢床を飛び出して来た所と見えて、急いで着替えたに違いない襟元は乱れ、いつもは一括りにしてある髪も、下ろされたままだ。足を止めずに、顔にかかる鬢髪を振り払い、手にもったままだった山月刀を腰帯の間に差し込んで、自分に集まる視線に顔を上げた。

「落ち着け。族長は直にお見えになる。それよりも、誰か、手の開いている者を集めて、十人編成で、外にいる家畜の回収に当たってくれ。残りの者も臨戦態勢で集落で待機、追って族長の指示を仰げ」

ざわざわと喧噪が波のように伝わっていった。

「なぜ、十人編成なんだ?これは、戦なのか?」

「それは、族長様の命令なのか?」

「誰かが神山に火をつけたとでもいうのか?」

「族長様は、どうしたんだ?刹羅様は!？」

矢継ぎ早に繰り出される質問の嵐に、日夏は内心の舌打ちを、深呼吸に代えた。息を深く吸い込み、そして吐く。

「落ち着けと言っている!」

相手を落ち着かせようというよりも、黙らせて発言の主導権を握ろうとする類の一喝だった。

「いいか、家畜を連れ戻すのは、あくまで、この火災に脅えた家畜がどこに逃げるとも分からないため。これが他部族の襲撃の可能性は極めて低いが、もし万が一、これが襲撃であった場合、敵が真っ先に狙うのも、やはり家畜。だから、戦時の十人編成だ」

敵に遭遇しても応じる事の出来る必要最低限の数、また今の人員から割けるぎりぎりの数でもある。

「さつきも言ったように、残りは族長が参られるまで、武装して集落で待機。以上、これは族長命令だ。なぜなら、今からここにやってこられる族長様は、全く同じ事を命ぜられるに違いないからだ」理解と動揺の狭間で揺れている彼等の葛藤に、日夏は最後の一押しをくれる。

「分かったら、早く動け！敵も家畜も待つてはくれない」

それがまるで号令であつたかのように、趨勢は定まり、人々は動き出した。それを横目に確認しつつ、日夏は自分の馬に飛び乗った。後の指示は、程なく駆けつけてくるはずの父親の領分である。

「待てよ！」だが、馬腹を蹴るよりも、薙が馬の手綱を取ってその行く手を塞ぐ方が速かった。「日夏は、どこに行くんだよ」

「神山へ」

短く言い放つ日夏に、薙の顔色が変わった。

「なんでだよ!？」

「発火元と、衍葵の安否を確かめるためだ」

「だからって、一人では危険だ。族長様の決断を待つてからでもいいじゃないか。これが、他部族の奴等の仕業だというのなら、尚更そうだ。それに――」

「どけ。一刻を争う」

薙の言葉の方が正しいと分かっていた。族長は直にやって来て、遅かれ早かれ火元の究明にも、人員を割くだろう。それまで待つてその部隊と共に行動するのが、正しいやりようだと頭では理解して

いる。これが人災である可能性を考慮する限り、自儘な単独行動は避けるべきだ。だが――

（そんな悠長な事をしていたら、助かるものも助からなくなる）

この場のほとんどの者は神山の火の方にばかり注意を向けて、家畜の安否を気遣っても、今現在、火元である神山のただ中にいる筈の少年を、心配する余裕はないように見えた。

「手綱を放せ！」

日夏は重ねた。

「放さない！」と薙が応じる。「感情的になつて間違つた判断を下そうとしている人間に命令される筋合いはない。今の日夏は、全然、日夏らしくない。大体、なんで、いつも衍葵なんだ！？」

「時間が惜しい、馬鹿なことを言っていないで、どけ」

「そもそも、あんな奴が入ったから、神山が怒つたんじゃないのか！？あんな腰抜けが戦士の承認を受ける事を神山は許さないつて、これはそういう事なんじゃないのかよ」

「それが、こんな状況で言う事か。時と場合をわきまえろ」

薙の顔が屈辱に赤らむも、道を開けようとする気配はなかった。論争する時間はなかった。力づくで、強行突破をせざるを得ない。それを実行に移そうとしたとき、

「薙は、お主の身を案じておるのじゃよ」

第三者の声。息をきらして着の身着のままの姿は、普段の彼の神秘と威厳を装った姿とはかけ離れていたが、その総白髪は見間違えようもない。

「……曾様^{ひいさま}」

巫人だった。

「女人は神山に入つてはならぬ。薙はそれを心配しているのじゃ。入るべきでないものが入れば、神罰が下る……。やはり、衍葵を神山にやるべきではなかったのかもしれぬ」

「曾様まで、そんな事をいうのか。これが、衍葵のせいだ！？」「日夏は燃える空に手を振り上げる。「馬鹿馬鹿しいっ！仮にも神山

と称される霊山が、たかだか人間一匹のせいで燃えたりするものか」

「理由が、なんだとしても」穏やかだが譲らない口調で、巫人は重ねる。「お前は、神山に入ってはならぬ」

「なぜだっ！？女だからというのは、聞き飽きた」

「掟だからだ。族長の娘であるお前が、掟をないがしろにする事は許されぬ。掟を敷く側にある者は、誰よりも掟に忠実であらなければならぬ。それが、けじめというものだ。それに、お前が禁を破ったなら、同じ理由で、族長様もお前を厳重に処罰せざるを得なくなる。分かるな？日夏」

「・・・・・・・・」

日夏は手綱の持ち手を握りしめる。巫人の言葉には一理あった。遊牧の民にも、法はある。慣習法という名の法。先人の知恵という名の不文律の体系。中には、首肯しかねるような馬鹿馬鹿しいものもあるが、法は原則として尊ばれなければならない。悪法であればこそ、変えるためには正当な手続きを踏まえることこそが要求される。

だが、そんな道理は犠牲にされる人間の前に、果たしてどれだけの説得力をもつて響くというのだろうか？ たった今、神山にある衍葵の命を前に、処罰だの、掟だの、それが何だというのだ。どうして、そんな言葉しか出てこない？

「日夏、掟が軽々には破られては――」

「軽々にだっ」

遮って、日夏は、巫人に対した。常に親愛と尊敬を持って接してきた部族の長老、神々の代弁者を相手に、今は払うべき敬意を見失っている。

「衍葵は、今もあの炎の中にいるかも知れないんだ。たった一人で、助けを求めているのかもしれない。それを、軽々にだっ？ここにいる連中にとって、あいつの命はそれだけのものではないというのか？」

「誰もそんな事は言っていない」

嘘だ、と日夏は思った。確かに、衍葵を積極的に嫌っているのは、むしろ薙などの若い連中だ。

しかし、巫人をはじめとする大人達の、衍葵に対する妙によそよそしい態度。それは、疎んじている表現がもつとも近く、衍葵の何が彼等をしてそういう態度をとらせるのかまでは知る由もなかったが、日夏はいつも感じて来た。彼等は、何か隠している、と。

それと、もう一つ分かっている事がある。彼等は、衍葵を嫌っていないとしても、決して好いてもいない。

「だが、衍葵の命と、日夏、お主の身の安全では、後者の方が重い。それを受け入れられないという程、子供ではあるまい」

心が冷えていくのか、滾っていくのか。いずれにせよ、分かったのは、これ以上の言葉の応酬は無駄だという事だった。自分も相手もゆずるまい。

「日夏！聞いているのか！？」

これ以上の問答は無意味。

「・・・曾様は気が早い」

これは、帰ったら父上の御冠が怖いな、とそんな場違いなことを心の片隅で思った。

「私は、族長の娘というだけで、いまはまだ一介の族民に過ぎないという事をお忘れですか？現時点では、部族にとって、衍葵の命と私の命、どちらが重いかなど言えはしないし、またそうであるべきです。それこそが曾様のおっしゃる、けじめというものでしょう。それに、私が将来、上に立つべき者だと言うのなら、なおさらの事、族民を守るために、まず己みずから体を張らないで、誰が体を張ってくれるというのか」

第一、と腰の山月刀を抜き放つ。薙が、ますます硬く手綱を握り締める気配があった。

「人一人の命すら救えない掟など、糞喰らえだ」

ぶつり、と左の手綱を山月刀で切り離すと同時に、薙の体を突き飛ばし、日夏は馬腹を蹴った。虚をつかれて、尻餅をつく薙と、呆

気にとられている巫人を尻目に、人馬の一体は、瞬く間に遠ざかっていく。

「馬鹿野郎っ！」

薙は、拳を握りしめ、見る見る内に小さくなっていく背中に吼える。巫人は、色の薄くなつた灰色の瞳に翳りを宿し、部族の次代の担い手の行く手を見上げた。西の空を焦がす炎は、先ほどより勢いを増しているように見えた。

「薙」

「ああ、承知の上だ」

飛び起きた薙は、己の馬を求めて駆け出した。すべき事は明白だった。

止められなかった上は、追い駆ける他にない。

第三章 異形 (5)

馬の背に覆いかぶさらんばかりに身を低くして、日夏を一路神山を目指してひた駈ける。

助けたいから、助ける。行きたいから、行く。それが許される立場にあることを、いまほど感謝した事はなかった。今の自分は、まだ気持ちだけで動ける立場にある。

自分が父の立場であるならば、これほどに猛威を振るう炎を食い止める事は出来ないと見て、貴重な人手を割いての神山への派遣は後回しにする。だから、是が非でも衍葵を助けたいのなら自分が勝手に動くしかないというのが、日夏の下した結論だった。

それに、実のところ日夏はこの件に、他部族が絡んでいるとは思っていない。

那伽是の勢力下にあるとはいえ、神山は近隣部族にとつてもやはり、程度の差こそあれ、靈山である。山を燃やす事は那伽是を動揺させ、挑発させるには効果的であるかもしれないが、引き換えに神山燃やしの汚名を背負う事になり、那伽是以外の部族をも挑発する結果になりかねない。

陽動という線も、同じ理由で却下だ。そこまでして、家畜を奪い、那伽是を叩きのめした所で、費用対効果が合わない。

大体、良くも悪くも草原の人間は、そんな回りくどい策は用いない。やるのであれば、単純に夜襲をかける方を選ぶだろう。

(ならば、自然発火か)

しかし、落雷の音など聞かなかった。それに、火の回りがあまりにも速すぎる。だからこそ、これが人為である可能性も完全には拭い去れないでいるのだ。この災厄の中心地にいる筈の衍葵ならば、あるいは何か知っているだろうか？

(・・・衍葵)

彼の気弱げな顔を胸をかすめて、日夏に後悔を迫る。

——私の言った事の意味、よく考えてみる。それで、分らないようだったら、その狼の牙を返すなり捨てるなり、お前の好きなようにしたらいい。

偉そうな事を言った。

何がよく考えてみる、だ。何の事はない。自分は単に衍葵が、自分の思い通りに振舞わないから、苛立つただけなのだ。薙に、いや薙であろうとなかろうと、あんな卑屈な態度を、仮にも自分が認めた人間がとるのが許せなかった。

辛そうな顔をしながら、薙の言うことを肯定する衍葵、己を貶める言辞を連ねる時の彼の表情が日夏は嫌いだった。自分と二人の時は違うのに、いつも第三者が介入した途端、衍葵は萎縮する。自分に返す視線にさえ、媚が混じる。態度が、変わる。

だからといって、それを裏切られた感じる道理が、ましてや相手を傷つける権利が自分にあるわけではない。よりにもよって成人の儀の直前に、些細な事で心を乱され、それを押さえられなかった。相手の立場も事情も斟酌せずに、感情のままに相手を傷つけたという点では、自分も薙も寸分違わない。いや、衍葵に近い分だけ、責めは自分の方が重い。

だからこそ。だからこそ、だ。

（あんな喧嘩別れみたいなのが、最後だなんて、私は絶対嫌だからな）

日夏の思い出せる限り、いつも衍葵は一人だった。

当人が一人でいることを選択したのか、あるいは自然とそうなってしまったのかは分からない。いずれにせよ、いつも人の輪から少し離れた所に、ぼつねんと立っている。それが衍葵だった。

本人が自覚していたのかどうかは知らないが、衍葵は意外に目立つ存在だった。その欠けた右腕を隠すような動作は、その混血の容姿と共に、良くも悪くも他から浮き上がって、目に付いた。

最初は興味本位だった。相手が迷惑がっているのは百も承知で、断るといふ事を知らない相手の性格をいい事に、連れ出し、連れ回

した。

そうすると、まず、片腕だというのに馬の扱い方が妙に上手い事を発見した。それは、必ずしも早駆けで勝つという類いの上手さではなかったが、とにかく馬に負担をかけない乗りかただった。本気で早さを競えば自分の方が勝つだろうが、その後の馬の消耗具合を比べれば衍葵の方に軍配が上がる、そんな上手さだった。

総じて、人から一步も二歩も遅れてついてくるような消極的な性格だったが、商人が交易や通行許可を求めて集落を訪れるときばかりは、普段は臆病なモグラが穴から這い出してくるような感じで彼等の話を興味深そうに聞いている。その変人振りを日夏は面白いと感じ、より深く興味を惹かれたのだった。

日夏は衍葵を認めていた。

認めていたがゆえに、なぜ彼が他者から下される評価に甘んじているのが分からなかった。

淡い髪色を恥じるようにいつも頭布をきつく巻きつけ、灰緑色の眼差しを地面に貼り付けている衍葵。わけもなく自信のなさそうな顔をして、はつきりと自分の意見を口にしない、煮え切らない態度。馬鹿にされても、苛められても、言われるがまま、されるがまま、傷ついているという事すら必死になって笑顔で覆い隠す。しかもそれでこちらをまんまと騙せおおせていると思っている大馬鹿者の幼馴染に、しかし、日夏はまだ死なれる訳にはいかなかった。

自分の謝罪をきっちり受け入れさせるまでは、なんとしても、死んでもらう訳にはいかないのだ。是が非でも生きていてもらわねばならない。

（だから、お願いだ。生きていてくれ）

膝で馬の脇をますますきつく締め、乗りつぶす覚悟で、日夏は馬を駆った。

赤い火の粉が、髪を焦がすのにも構わず、駆け通し、炎に燃え盛る神山にたどり着いた頃には、馬のみならず、日夏の息もあがっていた。山麓に、右往左往する影を見たのはその時だ。酷使に喘ぎ、

火に脅える愛馬をなだめるようにしながら、日夏はその影に近づいていった。胸をかすめた希望は、すぐに裏切られた。

「お前は・・・草影」

青味を帯びた灰色の体色は、確かに衍葵の愛馬だった。草影は、自力で束縛を振り切ったのか、繋がれていただろつ綱を引き摺って、炎の山麓をさまよっていた。炎に脅えながらも、主人を気に病んで離れられないでいたのだろうか。草影は、神経質気味に、蹄を地面に立て、鼻を鳴らしていた。

駆け寄り、草影をあやししながら、日夏は背中の中の鞍に手を当てた。一部、熱を持っているが、それは炎によって暖められたのかもしれない、先ほどまで誰かが乗っていたかどうかは分からなかった。

「草影、お前の主人はどこにいる」

赤い炎の照り返しを宿す草影の黒い瞳の中を、覗き込んでも望む答えは見出せなかった。暫しの逡巡の後、日夏は、馬二頭をその場に置いていく事にきめた。この炎の中では、馬を留めて置くことなど出来ないし、代替策を講じる時間もない。山道があるわけでもない神山に、馬で入る事は出来なかった。

「衍葵っ、衍葵！どこにいる。聞こえたら、返事をしろっ」

大声を上げながら、探し回る。麓の方だと言うのに、煙がひどい。実際、十分と歩き回らない内に、咽がいがらつぽく、口を明けては、咳き込む破目になった。服の裾を破いて、鼻を押さえながら、これ以上、上にいったら、大声を上げるのは自殺行為になるだろうな、と思う。しかし、声を上げずに、また相手からの応答なしに、山の中にいるたった一人の人間を探し出せる確率は奇跡に等しい。

（これでは、見つけ出したとしても、衍葵は・・・）

不吉な感触がじわじわと触手を伸ばしていく。嫌な感じは、ずっとあった。意識を向けぬことで弱気に捕らわれまいとした。

だが、ここに来て、急速に強まっていくように感じるそれは、ただの不安よりも性質が悪い。より本能に近い部分が、警鐘を鳴らししているのだ。このまま進めば、何か良くない事が待っている、と。

そして、経験に従えば、その声には耳を傾けるべきだけの価値があった。しかし、現時点に置ける悪い結果といえ、考えられるべきは一つしかなく、それだけは何としても認められない。だから、膨れ上がるそれを押さえつけて、ここまで来たのだ。

ゆえに、その姿を奇跡に等しい確率で見つけ出した時、日夏はしばし自分の幸運を信じられなかった。

「衍葵っ！」

地面に這い蹲るようにして倒れている衍葵を抱き起こし、その状態を確認する。弱いが、確かに呼吸はあった。胸の辺りが血で汚れているが、目立った外傷はない。口の周辺にも血がこびりついている。血を吐いたのだろうか。急く心を抑えて、日夏は衍葵に呼びかけを続けた。

「衍葵、しつかりしろ」

その睫が弱弱しく震え、奥から見慣れた灰緑色が現れた時、日夏は天地にあまねく神々という神々に感謝した。先ほどまで、胸に抱いていた悪い予感は一瞬、焦点を結ぼうと宙をさまよう衍葵の瞳をしつかりと覗き込む。

「私だ。分かるか？」

反応はあった。何度か睫が上下し、もどかしいほどに、ゆっくりと灰緑色の目が日夏に像を結ぶ。

「……ひ、なっ……？」

日夏は大きく頷き、「今、助けてやるからな」と励ますと、衍葵はうつすらと笑ったように見えた。

「……か、った。もう、見れないかと、おも……」

何が、良かったのか、見れないと思ったのか、明らかにする事なく、衍葵は再び気を失った。しかし、呼吸も脈拍もあり、確かに生きているという掌の上の実感揺らがない。ほっとしたような、まだ気を抜いている場合ではないという二律背反的な心持ちで、日夏は衍葵の状態を確かめる。このまま担いで下まで下ろしていつて大丈夫かを確かめなければならない。

心臓は動いているし、肋骨も無事。骨折も目立った傷も――

どくん、と自分の心臓の飛び跳ねる音を聞いた気がした。衍葵の体を診る指が、そこで止まる。一拍で飛びはね、以降、速さを増したままの己の心拍音を聞きながら、日夏は見間違いではないかと目を凝らす。

視線は、ある一点に、縫いとめられたままだ。しかし、何度瞬きをした所で、そこにあるものが変わる訳ではなかった。自分のこめかみの下が、どくどくと脈打っているのを感じている。膨張した血管の中を、血が引いているのが満ちているのか。

「日夏っ、畜生、追いつくのに、手間取った」

どれだけ、そうしていたのか、判然としない。ほんの数秒だった気もするが、もつとずっと長い間だったような気もする。しかし、まだ炎に巻かれていない所を見ると、さしたる時間ではなかったのだろう。

薙は、振り返らない日夏の脇まで来ると、その腕に抱かれた衍葵に気付いて瞠目する。

「見つけたのかっ！それで、無事か！？衍葵はっ」

「・・・・あぁ。特に、怪我はないようだ」

「なら、良かったじゃないか」

「・・・・あぁ」

気の抜けた返事を返す日夏に薙は顔をしかめる。衍葵を助けるために周囲の反対を振りほどいて飛び出していつて、無事の衍葵を発見したならば、何を気を落とす必要がある。喜んで然るべきではないか。

薙とて、衍葵は決して好きではないが、別に彼の不幸を望んでいた訳ではなく、無事なら良かったと素直に思う。後はこんな場所からは一刻も早く立ち去るのみだ。たとえ、動かさない方がいいような状態であったとしても、炎に包まれる神山に留まる事が出来ないのは自明の理ではないか。

「一体、どうしたって――」

彼の言葉も、そこで途切れた。薙の視線は、日夏のそれを追って、衍葵の体を這い、同じ場所で止まった。確かに、傷はなかった。どこにも。

その、右腕にも。

第四章 災厄の招き手 (1)

紺碧の空に、白い綿雲がぼっかりと浮かんでいる。剥き出しの肌を洗う風は心地よく、頬をくすぐる草の調べに耳を傾ければ、すぐにでも、うとうとしてきそうな昼下がりの午後。

しかし、四肢を大地に投げ出し、そのような牧歌的な静寂の中にわが身を置いて、薙の心が立ち返る場所は同じだった。

目を閉じれば、今でも瞼の裏に炎の残影を見つけられる。そう、今とて山火事が完全に鎮火した訳ではなく、神山の方角を向けば細くたなびくいく筋もの煙を見つける事になるだろう。

集落に戻れば尚、悪い。折角の日和を台無しにしかねない陰気な面相の族民達が肩を寄せ合って、五日前の出来事と部族会議の行方を論じ合っているに違いないのだ。それに耐えかねて飛び出して来たものの、結局は心が向かう先は変わらないということを再確認するだけの結果になってしまった。

「・・・衍葵、か」

以前はその名を耳にするたびに苛立ちを覚えたものだが、今、口にして見ると、その名は何とも言えない後味の悪さを残した。彼らしくもなく、鬱々とした気分をかこって、薙はため息をついた。

「衍葵が、どうしたの？」

突如として、頭上から降って沸いた声に、薙は飛び上がらんばかりに驚いた。思わず、上体を跳ね起こし、心臓に悪い乱入者に声を上げる。

「凜音^{りんね}っ！何で、お前がここにいるっ」

「失礼ね。薙を心配して追いかけてきたんじゃないの」

「つけてきたのかよ」

「人聞きが悪い・・・それより、何？私の気配にも気付かないほど、一心不乱に衍葵の事考えてたの？日夏の事、じゃなくて」

「しゃらん、と髪飾りの音を鳴らして、凜音は薙の隣に腰を下ろす。

彼女の言葉をいちいちまともに取り合うのは愚の骨頂と知りつつも、つい、「別に誰の心配もしていない」と応じている自分がいた。「誰も心配しているなんて言っていないよ。考えてるのって、聞いたただだよ」

「うるさい」

くすくすと凜音が笑う。

笑うたびに、しゃらしゃら、とその髪飾りが音を立てて薙を落착かない気分にさせる。凜音は、赤の羽織と腰巻、下ろし髪に金鎖を幾房もあしらった、年頃の少女らしい華やかな装いに身を包んでいる。

こんな風な衣装を身につけていては狩りは出来ないだろうと思う傍ら、似合っていると認めざるを得ないのも事実だった。もっとも、それを口に出してつたえることは薙にとっては敗北宣言に等しい。なにに対しての敗北なのか、それは薙にも分からない。

「それで？何があったの？あの夜」

薙は肩をすくめる。

「結局、お前も野次馬根性か」

正直な話、集落の人間たちの質問攻めには閉口している。事件の一部始終を目撃していたもう一人の当事者、日夏は族長の娘である以前に例の一件で負傷した怪我人であるり、目下、薙一人が質問の矢面に立たされているとあっていい。

「集落の皆に例の一件の話を聞いても、人によって話がまちまちだったり、食い違ったりで。それよりも、最初から最後まで間近で見ていた薙から直接聞いた方が確実だし、面白いかって」

「面白いつて……」

薙は顔をしかめる。

「不謹慎な事、言うなよ。怪我人が出てるんだぞ」

「あら。薙にそんな事言われたくないわ。薙だって、衍葵の事いじめてたじゃない。それが、衍葵があんな事になっちゃったからって、急に掌を返したように、今度は心配？ 馬鹿みたい」

自分でも自分の心境の変化を戸惑っていただけに、この指摘は痛かった。別に衍葵の心配をしている訳ではないのだが、不思議と以前のような直球の怒りはわいてこない。

衍葵のせいで日夏と刹羅様が負傷した以上、本来なら自分が衍葵糾弾の急先鋒に立っていてもおかしくはなかった筈なのだ。では、なんなのかと問われると、答えに迷うのだが、集落の一部の者の言うように、全てが衍葵のせいだったという論調には組しかねた。

むろん衍葵に責任がなかったとは思わないし、怒るには怒っているのだが、その一方で名前のつけられない感情が心の片隅にわだかまっている。

「それとも罪悪感、感じてるの？ 衍葵があんな風になっちゃった原因が自分だったと思ってる？」

心の内を見透かされた思いだった。

思わず相手を睨み返すも、凜音は動じず、甜てんとしたものだ。

辛辣な事を飄々（ひょうほう）と言つてのけるこの年下の少女が、薙は苦手だった。口が立ち、しかもうるさい人間には勝てない。なお不幸なことに、薙が凜音に抱く苦手意識はあくまでも一方通行のものであり、凜音にとって薙はどうやら、かまうべき存在であつたらしいということだ。

しかし、厄介なのに捕まってしまったと思う一方で、ここで打ち明けてしまえば少しは気が楽になるかもしれないという気持ちもある。そもそも、こんな風に一人で悶々としているのが、薙は大の苦手だった。

ぐるぐると、頭の中で堂々巡りする思考を誰かに打ち明けてしまえば、少しは楽になるのだろうか。

「・・・俺、あいつに、言っちゃったんだ」

「何を？」

「臆病者とか、腕なし、だとか。他にも色々・・・あいつの成人の儀の前に」

「それって、いつも言ってる事じゃないの？」

何を馬鹿な事をとでも言いたげに、凜音は身も蓋もなく、そう応じた。普段の薙であればそこで腹をたてて口を閉ざしそうなものだったが、この時ばかりは、「お前なあ」と上げかけた抗議の声も呑み込んで、悄然と続ける。

「でも、さ。ほら、曾様も言ってたじゃないか。邪は何もない所には取り付いたりしない。そこに素地があり、土壌があるからこそ、付け入る余地があるんだって。そして、衍葵は、あの神山で悪いものに捕らわれた……別に、全部が全部、俺のせいだなんて思ってる訳じゃない。でも、思っちゃうんだ。もし、あの夜。せめて、あの夜、俺があんな事を言わなかったら、何かが変わってたんだろうかって。神山も燃えず、衍葵も以前通り、刹羅様や日夏も……」

薙は、自分の顔が不本意に歪んでいくのを感じて、顔を伏せた。

一人で考えていた時はそうでもなかったのに、こうして口に出して誰かに話した途端、心が脆くなったように感じるのは何故だろう。自分は、もっと強い人間のはずだ。だが、自分は何か一つでも出来たかどうか？ 刹羅様が襲われとき、日夏が斬られたとき、何か一つでも止められただろうか？

止められはしなかった。そう、自分はある一件の当事者などではない。もっとも間近で見ていただけの、ただの傍観者だ。

「まったく、重症ね。猪突猛進、単純馬鹿の薙が、こんなになるなんて。大体、罪悪感覚えるぐらいなら、初めから衍葵を苛めなきゃいいのに」

「お前な。こっちは真面目に——」

「でも、薙のせいじゃないよ」

ふいに、凜音が真顔になったので、薙は口に出しかけた言葉を途中で失った。凜音は体をよじって薙を覗き込み、自分の瞳に薙の瞳を映しこむ。強い光を宿した栗色の眼差しがもう一度同じ言葉を繰り返す。薙のせいじゃない。

「——つて日夏ならきつとそう言つよ」

「なんで、そこに日夏が出てくるんだ」

正直、日夏の事を考えるのは、今は少し辛い。動くべき時に動けず、守ると決めた人間に傷を負わせてしまった自分が、どの面を下げてその本人と向き合えるというのだろう。

「悪いものが好む土壌。薙がいうように、確かに衍葵は、心の裡にそんな場所をかこつていたのかもしれない。でも、それは衍葵自身が作り出した場所よ。衍葵が何か悪いものに取り憑かれたとしそれは他の誰でもない衍葵の心の弱さのせい。外部からの干渉は原因の一端になり得ても、決して主因じゃない。邪であろうと何であろうと、それを受け入れたのは衍葵。刹羅様や日夏にあんな事をしたのも、衍葵。あなたじゃない」

違う。日夏なら、きつとそうは言わない。これは、凜音の言葉だ。薙を励まそうする、また自身、己の言葉を信じている凜音の言葉だ。薙もまたその意見に異論がある訳ではない。ただ・・・

「ずいぶんと冷たいんだな。衍葵はお前の兄貴だろうに」

反論したくなる。自分でも自分の心の乱れが分からない。これでは、まるで、衍葵に同情しているみたいではないか。

日夏は肩をすくめる。

「兄といつても、一歳も離れていないけれどね。それに、兄なら他にもいるし、兄だからって、何が特別なわけでもないわ。ましてや、繋がってるのは半分だけ、まともに話したこともない異母兄妹よ。正直な話、私、衍葵がああなつたと聞いても、別に驚きはしなかったわ。ついに、溜まっていたものが弾けちゃったかって、そんな感じ。でも、日夏はともかく父様の怪我は自業自得よ。だって、衍葵がああなつたのには父様にも責めがある。ずっと衍葵を無視し続けてきたんですもの」

言われてみれば、確かに刹羅様は衍葵に対して、いつも冷たかったと薙は考える。

不肖の息子であるという事を差し引いても、刹羅の衍葵に対する

態度はやはり不自然に思える。何故かなど深く考える事はなかったが、今にして思えば、衍葵に距離を置いていたのは、何も刹羅様ばかりではない。部族の大人達は多かれ少なかれ同じだ。どこか、衍葵を避ける雰囲気部族全体に存在していた。

今、初めて、衍葵の心の裡に思いを馳せる。

父親に疎まれ、部族の者に遠巻きにされ、自分を始めとする同年代の少年からは蔑まれ、こうなってしまうても実の妹にすら心配のされる事はない。そんな環境にあるという事は、一体どういう気持ちにするものなのだろうか？

薙が知っている衍葵は、心身共に軟弱な少年だ。他者におもねるような笑いも、人の顔を真つ向から見ようとしないところも、そのいちいちが癪にさわった。

挑発にも暴力にも抵抗一つしない、されるがままの投げやりな態度は、むしろ弱者という立場を逆手にとった一種の示威行動なのではないかとすら思えてくるほどだ。

衍葵は薙の戦士としての美意識からもっとも遠いところに位置している。

弱いのは仕方がない。負けるのは仕方ない。しかし、あいつは立ち向かおうとすらしない。最初から諦めているのだ。何もせず、何もしようとせず、最初から敗北を受け入れ、それに甘んじている。

そのくせ、自分ばかりが辛い目にあっているような被害者面をして、周囲の同情を誘うだけは一人前だ。衍葵のあり様が薙の目には、軟弱と映る。卑怯と映る。しかし、自分を苛つかせたそれらの衍葵達が、あの三日前の夜の衍葵の姿に重なった時、なぜか胸に痛みが点るのだ。

薙が腕なしと呼んではばからなかった衍葵は、もはやその蔑称を冠する事はなだらう。

薙が、炎の神山で見つけた衍葵は、無傷はおろか、欠けた右腕を生やした姿でそこにいた。自分の目で見たのでないのなら、到底信じられなかっただらう。しかし、薙はそれを見、触り、確かめた。

わずかな継ぎ目の他には左腕と寸分変わらない、その右腕。知らぬものが見たならば、衍葵が産まれてこの方ずっと五体満足だったと信じて疑わないだろう、当たり前の人間の腕の形をしたもの。しかし、それを目の当たりにした時の、異様なまでの薄気味悪さを、薙は忘れられない。

これは何か悪いものではないのか、そう思った。

そして、その思いは、日夏と意識不明の衍葵を担いで集落に戻った際、最悪の形で実現される事となった。出迎えた族民達の注視の中、衍葵を地面に下ろすと、その異様を見咎めた最初の人間から、ざわめきが波のように広まっていた。

何をどう説明したものか考えあぐねている自分の隣で、固い表情をした日夏が『曾様を』と巫人呼んだ。

そう、いかな日夏とて、次に起こる事までをも予測し得た筈もなかった。

目に見える傷は確認出来なかったものの、衍葵の服はひどく焼け焦げ血に汚れていて、彼が炎に巻かれる山中から薙達のいる麓までに降りてくる間、何があったかは分からない。何よりも、あの正体不明の右腕。あの状態の衍葵を、巫術や医術の心得のある人間に見せようとするのは、至極真つ当な行為であり、かんがみれば、そんな普通の状況判断すら自分は出来なかったのだという事になる。

巫人は、やがて人の輪を、かいくぐってやって来た。薙は、彼のすぐ脇に立っていたので、衍葵を目の当たりにした時の巫人の顔色の急変を間近で見ていた。

『曾様、衍葵を診てやってくれ』

日夏は、そんな巫人の様子に気付かないのか、急かすようにそう言った。しかし、巫人は衍葵に触れようとはせず、蒼白と化した顔で、一步二歩と後ずさった。色を失くした顔色に、常ならぬ切迫した表情が浮かび、唇がわななく。人差し指が、まっすぐに地面の衍葵を指し、震えた。

『・・・な』何度も唇が開閉し、やっと言葉を紡ぎだす。『なん

という、事だ』

『曾様っ、これは——』

『それに、寄るでない！日夏』

なんという事だ、と巫人は口腔の中で繰り返した。

『それは穢れじゃ。古き文言に数多の名で記される、禍きもの。

草木を枯らし、土を汚し、山を渡る不浄のもの。災厄の招き手。それこそが、神山に炎を呼んだのじゃ……。衍葵は、穢れに囚われた』

『違うっ！曾様っ、落ち着いてくれ』

『去れっ、魑魅魍魎め。衍葵の内よりとく去れっ！去って、泥濘に帰るが良いっ！』

『曾様！』

胸元の小刀を取り出し、巫人は迷わずに、それを衍葵の右腕に向かって振りかぶった。それを止めようとする日夏と巫人の腕が交錯し、衍葵の上でもつれあった。

そして——

第四章 災厄の招き手 (2)

「それで、どうなったの？」

無邪気な凜音の反応がうらめしい。

事後に説明された凜音と違って、薙は当事者である。まず神山が燃え、日夏を追いかけて山に入り、腕を生やした衍葵の姿を発見し、ほうほうのていで集落に戻れば、部族の神事を司る巫人が、その衍葵にやおら不吉な託宣をくだし、刃を振り上げたのだ。日夏までをも巻き込んで。

まさに想像だにしない展開の連続であり、しかも、今、思い返してみるだけに、それとて一連の事件のほんの始まりに過ぎなかったのだ。

魑魅魍魎、災厄、穢れ・・・次々と巫人の口からほとばしりでる禍々しい言葉の羅列に気圧されて、あの時は巫人が何を言っているのか正直分からなかった。全てが吹きすぎた今になって、ようやくこう言うことが出来る。あの右腕は、神山に炎を呼んだのかどうかはともかく、確かに災厄の招き手には違いなかった。

それで、と急かす凜音に、薙はため息をつく。

「衍葵の右腕はまだくつついてるんだから、想像できるだろ」

そう、いつまで経っても、血は大地を濡らさなかった。凶刃を止めたのは、日夏ではなく、巫人でもなく、衍葵本人だった。より正確を期せば、止めたのは衍葵の右手だ。

『・・・だ』

ゆらり、と衍葵が起き上がる。夢遊病者のような頼りない動きであったのに、つかまれた巫人はその右手を振りほどけずにいた。やがて、巫人の手から小刀が落ち、衍葵の足下に落ちた。

『・・・あいつは、どこだ』

それは衍葵の声でありながら衍葵のものではないようだ。衍葵が人形のようなぎこちない動作で、地面に落ちた小刀を拾い上げる。

『あいつ、だ……ようやく、見つけた、ようやく』

うわごとのように、衍葵はそうくり返す。深くこごった声の響きは、繰り返すうちに熱を取り戻していくように、そこから激情を帯びていく。うめく巫人を一瞥もすることなく、衍葵は自分を取り囲む人間たちに顔を上げた。

遠巻きにする人ばかりを睥睨^{へいげい}する目に、もはや気弱な少年の面影は見取れない。

怒りに塗りつぶされ、激情に煮つまった目は、その場に居る誰をも見ていなかった。

巫人も、薙も、日夏をもさえ、他の部族民と十把一からげに素通りする目は、何かを探すように、右に左に動き、焦燥を深めていく。限界まで引き絞られた弓弦のように、定まらない、ぶれる視線に、ただならぬものを感じて人の輪はじりじりと後ずさりしていった。

『ど、どうしたっていうんだ。衍葵』

『そうよ。落ち着いて。あなたは今、神山から戻ったばかりで混乱しているのよ』

こいつらは、何を言っているんだ。薙は思った。

これが衍葵に見えるのか。まるで俺たちを認識してない、この猛り狂った目が、衍葵のものに見えるのか、と。

それに、もう一つ、奇妙に思ったことがある。確かにその目に脅えるのは分かる。腕一本余計についた他には、物理的に何が変わったわけでもない衍葵だったが、その目には、人をすくませる何かがあった。薙自身、知らぬうちに掌と背中にくっつきと汗をかいていたほどだ。

それでも、彼らの声に潜むおもねるような響きは解せない。未知のもの、怖れるものに本能的にへつらうというのが人間の習性といえどそれまでだが、彼らのそれは、もっと実態のある、どこかしらあざとい媚のようなものが感じ取れた。

『衍葵、大丈夫よ。おちついて』

言葉とは裏腹に、その声は硬く、大丈夫だと衍葵に呼びかけるい

う声の主は、決して人の群れから前へ進み出ることがない。いずれにせよ、その声が衍葵に届く事はなかった。

『答えろっ！ あの女は、どこだ！！ どこにいる』

狂騒に駆られた衍葵は吼える。

衍葵のいう所の、あいつ、あの女が誰なのか、薙には見当もつかなかったが、巫人には心当たりでもあったのだろうか。巫人の顔から、先ほどの神がかりの激しさが消えていき、脅えとも恐怖ともつかぬ感情にゆがんでいく。

『気をしっかりもて、衍葵。お前のいう、あの人はもういない。お前は、悪いものに憑かれ、我を失っておるのだ』

さつきまでは、衍葵に憑いた悪いものに向けられていたはずの言葉は、今は衍葵本人に向けられている。衍葵の視線が手元の巫人に落ちる。

『いない？』

『そうだ。もう、いないのだ。お前は、それを乗り越えたはずだ。納得したはずだ。あれは不可抗力だった。誰も恨んではならない。そうだろう？ お前は、誰も恨んでない。そうでなければ、誰よりもまず、お前自身が苦しむ羽目となる。誰も恨まず、遺恨を引きずらず、それが誰にとっても――』

『黙れ』

急速に衍葵の顔が歪んでいく。巫人の手を宙に引きずり上げ、無理やり自分にむけさせる。

『いなくなつてなどない。いなくなつて、たまるか。あいつも、俺も。まだ、だ・・・まだ、何も、何一つ、終わってなんかいない』

荒い呼吸。むき出しの敵意、憤怒、焦燥。そんな表情をした衍葵は、顔の造作すら違ってしまったようで、まるで別の人間に見えた。そんな衍葵の中のどこに、衍葵を見出したというのだろうか？ 巫人は尚も言葉を連ねる。ほとんど、哀願のような口調で。

『確かに、辛い出来事だっただろう。幼いお前にはことさらに。』

だが、お前は、それでも、ちゃんと、納得して、受け入れて――

『黙れっ！』

押し黙った巫人に、衍葵は噛み付かんばかりに、顔をよせた。

『貴様は、何だ？ 何者だ？ なぜ、こんなにも俺を苛つかせる？ 何もかも、知った風な口を利く？ 全てを決め付け、俺の代わりに結論を出そうとする？ 答える、老い耄れ。なぜ、貴様の言葉は俺をこうも苛立たせる？』

『……え、衍葵』

衍葵は巫人を地面に放り出し、小刀を握りなおした。

『貴様は、不愉快だ』

衍葵は吐き捨てる。

今まさに振り下ろされようとする小刀の下で、巫人は動けない。先ほどの情景が人物を置き換えて繰り返される。日夏が割って入るところまでそのままに、しかし襲撃者と被襲撃者が逆転して、奇しくも凶刃は二度その行方を阻まれる運びとなった。

背中に巫人をかばい、日夏は衍葵に立ちふさがり、その手首ごと斬撃を押しとどめた。

『衍葵っ！』

衍葵の体が遠目にも分かるほどに、びくりと飛び上がる。張りつめた瞳にわずかな撓^{たわ}みが生じ、刃ごしの日夏を映して、波打った。

『しつかりしろ、自分を見失うな。これはお前じゃない。お前の怒りでもない。引きずられるな』

『……あ』

決壊する。

見開かれたままの灰緑色の瞳から、涙が滂沱^{ほうた}と溢れ出し、あれほど衍葵を駆り立てていた激情を洗い流していく。小刀をもった衍葵の腕が、がたがたと震えはじめる。

『……ひ、なっ』

『そうだ、日夏だ。私に分かるな。衍葵』

ゆつくりと、日夏は衍葵の手首を解放する。そうすると、まるでつかい棒を失ったように、衍葵の体が傾ぎ、その場に崩れ落ちた。

『……あ、あ……俺は……僕は……』

『大丈夫だ。曾様も、私も無事だ』

衍葵は嗚咽をもらした。

四つん這いになって身を丸め、左手を鉤爪のように地面に食い込ませ、衍葵はもがく。歯ぎしりの音がすれて聞こえた。

『……に……にげ……日夏、巫人様』

『貴様、よくも……』

どちらも、切れ切れの呼吸の中で、かろうじて聞き取れた衍葵の言葉だった。まるで衍葵と衍葵でないものが、衍葵の内部でせめぎあっているような奇妙な光景だった。のつとられた、という巫人の言葉を薙は思い出した。

もはや聞き取れない呻き声を続ける衍葵に、日夏は歩み寄り、その右手から小刀を奪おうとする。だがそうはならなかった。

衍葵の父親、刹羅が、騒ぎを聞きつけて駆けつけてきたからだ。

第四章 災厄の招き手 (3)

『衍葵が戻ったと聞いたが』

刹羅様は、人だかりの外から、確かそんな事を言った。声に動揺が見られたのは、あるいは気のせいであつたかもしれない。しかし、衍葵の肩がびくん、と跳ね上がるのを見たのは気のせいではなかった。

『・・・あ』

それは最初はかすれた声だつた。

『あああああああつー!!』

悲鳴とも咆哮ともつかぬ絶叫が衍葵の口からほとばしるや否や、丸めた背中がさらにばねのように曲がり、鉤爪の形をした両手の指が大地に喰い込み、踏み切る。まわりつく日夏をもとめせずに、矢のごとく飛び出した衍葵は、遠巻きにする人だかりを突き飛ばし、薙ぎ払い、とても人とは思えない速さ、動きで跳躍を繰り返して、目指す人間に迫る。

ほぼ直線を描く衍葵の進行方向には、状況を把握出来ない刹羅がいた。

悲鳴のような咆哮がやまない。剣技も何もない、獣の動作で、手に持った刃を、高く飛び上がった上空から、我が身もろとも叩きつける。

刹羅が刀を抜いて、それに応じ、ぎいん、と鈍い音が暗夜に響き渡った。

血の飛沫と折れた剣先が宙に舞った。

その果てに薙達が見たものは、刹羅に馬乗りになった衍葵と、彼の手に握られ、刹羅の肩に深々と突き立てられた小刀の柄だつた。信じがたいことに、激突で折れたのは、儀式用の小刀ではなく、刹羅の刀の方だつた。

衍葵は小刀を引き抜き、一度は仕損じた急所をめがけて、なおも

振りかぶった。

『衍葵っ！』

追いついた日夏がそれを止めようと割り込む。先ほどは、日夏の静止で止まったはずの衍葵は、この時、割り込んでくる彼女にすら横風の一撃を飛ばした。

切っ先をそらすために半ば自分から飛んだとはいえ、斬撃を受けて吹き飛んだ日夏には目もくれず、衍葵の凶刃は迷わず、再び刹羅を向けられようとする。

だが、そこに生じた一瞬の隙に、薙は後ろから衍葵に組み付いた。
『う、あああああああつ』

声帯を壊さんばかりの異様な叫声を間近に聞く。衍葵を後ろから羽交い絞めにしたものの、それを振りほどこうとする衍葵の力は、尋常ではなかった。部族の男達が加勢してくれなかったら、恐らくは数秒も持たなかったに違いない。

動きを封じられた衍葵はそれでも尚、手負いの獣のごとく暴れまわり、結局、態勢を立て直した日夏の手刀が、その首に打ち込まれて気を失うまで大人しくなる事はなかった。

刹羅様は、言葉もなく、また折れた刀を手放す事もせず、ただ見開いた目で自分の上からどかされる衍葵を見ていた。その肩口から衣服が血に染まり、赤い色がじわじわと広がっていく。

振り返って、気を失った衍葵を見ると、今しがたの凶行が嘘のような、見慣れた顔がそこにあった。しかし、嘘ではない証拠に、その気弱気な顔には、返り血の飛沫が点々と跡をつけて残っている。

刹羅と衍葵が運ばれていっても尚、薙はそこに立ち尽くしていた。頭の芯がじんじんと痺れ、心も体も飽和状態だった。

『日夏！大丈夫か』

誰かが上げたその声を聞いて薙は我に返る。

『ああ。かすり傷だ。臍はやられてない』

先ほどの痛みあいの最中に、負った傷だ。抑えた腕の傷口から、血がぼたぼたと腕を伝い、指の先から地面に滴っている。口でいう

程、浅い傷ではなかった。

ようやく、その時になって悪寒がやってきた。

自ら後方に飛んでこの傷なら、まとも受けていたなら、どうなっていたのだろうか？ 衍葵の獲物が小刀でなかったのなら、どうなっていたのだろうか？ 相手が日夏や刹羅様でなかったのなら、果たして怪我だけで済んだだろうか？

そんな仮定は無意味だと知っていたが、それでも否定しがたい事実を薙に気付かせた。

衍葵、あいつは、刹羅様を殺そうとした。そして、それを阻むものは、誰であろうと、日夏であろうと殺しても構わないつもりだった。少なくとも、あの斬撃は何の躊躇も手加減もなしに日夏に放たれた。

胃の腑の奥から這い上がってくる何かが、怒りなのかそれ以外の感情なのかは分からなかった。それが衍葵に向けられたもののなか、あるいはその中であってただ翻弄されるばかりだった自分に向けられたものだったのかも、分からない。ただ、敗北感だけが、強く残った。

（俺は、何も出来なかった）

薙は拳を握り締める。

あの日以来、刹羅様は臥せったままだが、噂に寄ると、その左肩より先は神経をやられていて、治癒しても元どおりに動く事はないのだと聞く。日夏の怪我は、それに比べれば浅く、包帯を巻きつけ片腕を釣った姿は痛々しいが、本人の申告どおり、幸いにも腱はやられないかったため、直に癒えるだろうとの事だった。

しかし、それでも、傷跡は残る。それを日夏が気にする事はないだろうが、仮にも日夏は女性であり、嫁入り前の女性の体に傷跡が残るという事を軽々しく考えることは出来ない。

そして、薙はずっと日夏と行動を共にし、一部始終を目の当たりにしていたにも関わらず、彼女を守れなかった。それどころか、最後の最後になるまでは、気を吞まれて、動けずにいた。一連の事件

のもっとも間近な傍観者。それが薙が自分自身に下した評価だった。

当然の話だが衍葵はあれ以来、拘束監禁を余儀なくされている。そして今、その処置を決めるに当たって、部族会議が開かれている。大天幕の中では、連日、部族の男達が集まって何かを協議しているが、その中で何が話されているのかを薙達が知ることはない。最終決定が下されるまでは、その詳細については立席者に、厳しい緘口令が敷かれているためだ。

「今日からは、父様も参席すると言っていたわ。まだ、熱が下がってはいないみたいだけれど」

凜音は、自分の父と兄に関する事だというのに、まるで他人事のような。無論、彼女は一部始終を目撃したわけではなく、伝聞で事情を知った訳だが、この不自然なまでの距離の置き方はどうだろう。それまでの薙ならば、自分の事を棚に上げて薄情と詰ったかもしれないが、今はそこに凜音の心の微妙なひずみを見るような思いだった。

そう、ひずみはきつと最初から存在していた。衍葵に。刹羅様に。色々な人間の心の中に。ただ、自分にはそれが見えていなかった。そういうことなのかも知れないと今は思う。

「いい加減、元気出しなさいよ。湿っぽく考え込んでるのなんて薙らしくないよ」

そう、凜音の言う通りだ。悩むのは自分の流儀じゃない。これでは、それこそ衍葵の事を言えた立場ではない。

日夏に顔を合わせづらいと感じるのなら、なおさらのこと、逃げるに正面きって会ってみることだ。どんな言葉をかけたら、などという事は、まずは自分をその場に置いてから考えればいい。衍葵が今どうしているのか、部族会議の動向がどうなっているのか、知りたければ、何よりもまず己自ら動かねば始まらない。それでこそ、凜音の悪口雑言に足る猪突猛進の単純馬鹿に相応しいやり方ではないか。

「凜音、お前もたまにはいい事いうな。お蔭ですこし吹っ切れた」
足についた土ぼこりを払い、立ち上がると、少し視界が開けた気がした。薙の豹変振りが飲み込めない凜音は「ちよっと、どこいくの」と抗議の声を上げるが、その時にはもう薙は馬に向かって駆け出していた。

「待ちなさいよ。感謝しているなら、ちゃんと最後まで説明していきなさいよ！」

^{あぶみ}鐙に足をかけ、馬の背に飛び乗って初めて、薙は大声を放って返す。

「集落に戻る！」

「だからっ——」

結局、凜音は呼吸を無駄にする愚を悟り、複雑な心境で、小さくなつていく人馬の姿を見守った。薙を励ましたのが果たして正解だったのかどうか、それを彼女は考えていた。

第五章 きずあと (1)

「手早く済ませろよ。交代が来ないうちに。それと――」
見張り番は執拗に念を押したようだった。

「ああ。分かってる。約束は守るさ。脅迫めいたことをするのも、これが最初で最後だ。例の事は、誰にもばらしたりなんかしないし、これ一回きり、二度と持ち出したりしない。ここから出てくる頃には、綺麗さっぱり忘れてるさ」

見張り番の渋面をよそに、薙は天幕の垂れ布をくぐった。

まだ日も高いというのに、締め切られた天幕の中はほの暗く、空気が重苦しく滞っていた。天幕の内布にそって補強用の柵がぐるりと張り巡らされている他には、炉も家具もなく、地面すらむき出しの殺風景さは、そこが通常为天幕ではないという事を誇示しているようだった。

何もない空間の中央に打ち込まれた太い杭には、後ろ手に縛り付けられている人間がいる。

縛り付けられたまま、両足を地面に投げ出して、首を肩に預けている姿は、一見して眠っているようにもみえた。記憶にあるものよりもその体は、ひと回り痩せたように思えた。

「おい」

声を投げかけると、灰褐色の前髪が揺らぎ、ゆっくりと頭が持ち上がる。その前髪からのぞく、面変わりのあまりの激しさに薙は、ぎくりと足を止めた。

削げた頬、ひび割れた唇、振り乱れた髪。古い、血と汗の臭いが鼻につく。監禁状態というのは、これほどまでに人を荒廃させるものだろうか。

薙を見返してきたのは、感情の風化しきった二つの空洞だった。これまで薙を苛立たせてきた脅えも卑屈も、何一つ見当たらない、

すべてが消え失せたかのような二つ穴は薙を映しても何の反応も見せなかった。

虚をつかれ立ち尽くすこと暫く、薙は咽を鳴らして、ようやく声帯の機能を取り戻した。

「……その、なんだ。元気か？」口に出してから、自分の言葉の馬鹿馬鹿しさに気付く。「って、元気なわけないか。何言ってるんだろつな、俺」

無意味な言葉で沈黙を埋める中、ふと衍葵の足元の食器に気付く。碗の中には、手をつけられないままの食事がそっくりそのまま残っていた。少なくとも、食事は与えられているというわけか。

「食わないのか？……あ、手を縛られてたら食えるわけないよな。あいつら何考えてるんだ」

憤慨して天幕の外にその旨を伝えるが、返ってきた見張り番の声が言うには、

「無駄だ。この三日というもの、そいつは食い物ひとかけら、飲み物一口だって口にしてない。口元までもってつたって口に入れようとしないんだから、仕方ないさ……多分、もう食う必要もないんだろつ。少なくとも、人間の食い物はさ」

あまりといえはあまりな物言いだつたが、実をいえば薙自身、見張り番と同じ考えが脳裏をかすめたがゆえに、その言い様を責めることは出来なかった。

しかし、衍葵の衰弱ぶりを見る限り、何も食わなくとも平気というわけではないだろう。

「そうでなくとも、情けない体格してるお前が、絶食なんかしても骸骨になるだけだぞ」

やはり返事はない。

「いつとくが、俺は別にお前を心配していわけじゃないからな。ここに来たのは、あの夜、神山で何があったのか、それを――」

「薙」

咽に絡んだ、低い声に、話しの途中で遮られた薙は、その事も忘れて押し黙った。あの夜以来、初めて聞く衍葵の声は、想像していたものよりも随分と平坦に響いた。

「出ていってくれ」

そう告げる声は硬く冷たく、取り付く島もなかった。一方的に拒絶された薙は、しばらくは何を言われたのか理解できず、従って反応を示すことが出来なかった。だが、やがて相手の言葉が脳裏に浸透していき、自分がどういう種類のあしらいを受けたのかを理解する。

「……出てけ、だと？ 今、出てけつつたか」

ずかずかと一気に距離をつめて、怒りにまかせて相手の胸倉を掴みあげる。

「こつちが、気を使つて下手にでてりゃ、いい気になりやがつてめえ、一体、何様のつもりだ」

薙の激昂に、「お願いだ」と衍葵は力なく繰り返す。

「僕の近寄らないほうがいい。分からないんだ、自分でも。何をしてしまうか。僕は……危険だ」

「ふざけるな。なんだ、それは？ 脅しのつもりか？ 部族きつての臆病者が、たかだか一本や二本、新しい腕を生やしたからって、大層な口をきくもんだな」

「……………」

「どうしたよ。変なものに憑かれてるんだろ？ 腹が立つたんなら、あの夜みたいに奇声を上げて暴れてみればいい。そしたら、俺なんてわけないだろう。え？ この化物憑きが」

挑発はしかし、何の反応も引き出すことはできなかった。襟元を絞り上げて、抵抗の気配はなく、木偶に掴みかかっているような気がした。生気のない灰緑色の目は、薙を見ているようできて、そのじつ何も見ていない。

「話すべきことはもう話した。聞きたいことがあるなら、その人達に聞けばいい」

拳を振りかぶる自分を止めることが出来なかった。いつかのようにそれをすんで止める事はなく、薙は感情のまま、衍葵の左頬にそれを振り下ろした。鈍い手ごたえがあった。傾いた衍葵の顔を襟首ごと引き戻し、ふたたび自分に向けさせる。

「ふざけるな！お前。あれだけのことを仕出かしておいて、言うことはそれだけかよ」

平坦な声が、同じ言葉を繰り返す。

「気が済んだんなら、出てってくれ」

薙はもう一度、衍葵は殴り飛ばした。

二度、三度、殴る拳が痛くなるほど殴打を繰り返し、衍葵の襟首を締め付け、力任せに背後の杭に叩きつける。

「お前のせいで、何人怪我したと思ってるんだ。刹羅様だって、日夏だって……糞！神山が燃えているのが分かったとき、日夏がどれだけ心配したんだと思っていやがる。あいつは一人で神山にお前を助けに飛び込んでったんだぞ。止めるのも聞かず、自分の成人の儀の時さえ破らなかった禁を破って、炎の中に、だ。それを、お前は……！」

衍葵が顔をそらす。それを許さず、無理矢理自分に向きなおさせると、感情のなかった瞳にわずかな波紋が見て取れた。どうやら、まるで廃人になったというわけではないらしい。

「…な、つは」

「聞こえねえな」

「……日夏は」平坦な声は変わらない。「日夏の傷は……」

「臍はやられてないが、傷跡は残るだろうな。一生」

わずかに揺らいだように見えた衍葵の表情を、薙は冷然と見下ろした。同情は微塵も感じなかった。少なくともこの一件に関してばかりは、こいつにその余地はない。顔をそらすことは許さないと思った。目をそむけることも。

「お前が父親につけた傷はもつとひどい。利き腕はもう使い物にならないそうだ。戦士として、刹羅様はもう終わりだ」

「……………」

「満足か？ お前は刹羅様を憎んでいたんだろう？ 憎い相手を、自分と同じ不具に出来て満足か？」

ひどく残酷なことを言っている自覚はあった。

「満足かって聞いてるんだっ！」

衍葵は答えない。涙一つ、嗚咽一つ、こぼれなかった。

覗きこむと、その灰緑色の目は再びうろに戻っていた。それを見て薙は悟る。これは、こいつの自衛手段なのだ。外界から己を遮断し、殻に閉じこもることで、自分を守ろうとしているのだ。自分を殺すことで、自分を守ろうとしている。

薙は舌打ちをする。こいつは、ただ弱いだけじゃない。卑怯だ。

他でもない自分の弱さが招いた事態をすら、直視することが出来ず、こつして逃げの一手で頼つかむり。

心を閉ざし、自分を殺せば、それで責任がなくなるとでもいうのか。自分が傷ついていいるから、それで自分が他に負わせた傷を忘れてもいいのか。弱ければ、逃げ出してもいいというのか。

薙が手を放すと、衍葵はつかいぼうを失ったように崩れ落ちた。その死んだ目を見ながら、こいつは本当に木偶になってしまったのだと思った。衍葵は悪いものに食い荒らされて、もうその中身はいくらも残っていない。

「…これじゃあ、日夏がいい面の皮だ」

喉に異物感があって、吐き捨ててしまいたい気分だった。

「あいつは、あんな目に合わされても、まだこりずに、部族会議が少しでもお前に有利に運ぶよう駆けずりまわってる。でも、お前がこれじゃ、そんな努力、滑稽なだけだ。お前は、ここから出たいとか、生きたいとか、これっぽっちも思っちゃいないんだから……」

馬鹿だ、あいつ」

俺も。

馬鹿だと薙は思った。

俺の言葉は、こいつの上を滑って、その核心には届かない。やる

ことなすこと空回りばかりで、自分の馬鹿さ加減に吐き気がする。
こんな事を言いたくて来たわけじゃない。

だが、どうだ。出てくる言葉はどれも衍葵を傷つけるために周到に準備されたものばかり。それすらも、うろのような瞳に吸い込まれて衍葵にたどり着くことはない。

「本当に、馬鹿だ」

「……ごめん」投げ捨てられた態勢のまま、衍葵は僅かにみじろぎした。「薙、ごめん。日夏にも……」

「謝るな！」

びくり、と衍葵が震える。

「おまえに、謝る資格なんてない」

俺は無力だ。無力であるということにかけては、俺も衍葵と大した違いがあるわけではない。

「日夏に何か言いたいことがあるなら、面と向かって自分で言えっ！俺は、おまえの使い走りじゃない」

そっぴい捨てて、薙は天幕を飛び出した。

第五章 きずあと (2)

焼け焦げた臭いが、鼻につく。大量の樹脂と獣脂を火にくべたような、なんとも嫌な臭いだった。

風向きが変わるたびに灰が巻き上がり、煙が目染みて視界が滲んだ。下生えが燃えて降り積もった地面は柔らかく、歩くそばから新雪のように沈んでは足跡を残していく。

辺り一面、焼け野原だった。

燃え残った草木や動物の死骸も、元の色は見る影もなく一様に黒い固まりと化して地面に散らばっている。かつては緑の裾野だった斜面のそこかしこにくすぶる残り火が、まるで鬼火のように揺らめいて見えた。

皮肉なものだ、と日夏は思う。一年前、父である族長を相手どつてまで立ちたかったこの場所に、いま誰にも咎められずに立っているというのに、ちつとも心は晴れない。

(こうして見ると、案外と小さな山だな。神山というのは)

近寄ることを許されない神聖なる禁足地は、それゆえに遠目にも大きく見えたものだ。いや、草原という平坦さに倦んだ目にとって、は等しく、不毛の地平線をかぎる緑の小山には何かしら胸をつくものがあつたのかもしれない。

春の移動の季節の度、神山は緑に賑わいはじめたその姿で日夏等を迎えてくれた。十六年間、季節の繰ること、その景観との再会と別れを繰り返してきた。自分が産まれるずっと昔からそこあつた景観が、この先もずっと続いていくものだと思い込んでいた。

日夏は腰に下げていた水筒を取り出すと、中身を地面にそそいだ。水は灰の降り積もった地面に降りかかり、点々と黒い染みを残して吸い込まれていく。陥没した水滴の跡を日夏は無言でみつめた。乾いた草原に生きるものにとって水は貴重な資源のひとつである。

水源の確保は往々にして部族の抗争の種になるし、本式の祭儀ならば水は絶対に欠かせない装具の一つだ。葬送はその代表格であり、渴いた大地に生きた者が死してなお渴えることのないようにと、生者は死者に水を送るのだ。

「誰を弔っておるのか」

日夏は振り返った。

「…曾様、いらしていたのですか。もう出歩いてよろしいのですか？」

巫人は、この五日間というものの、ずっと床についていた。日夏や刹羅のように、物理的な傷を負ったわけではない巫人だったが、精神に負うものか、それとも神託という巫技を行った負担か、とにかく五日前の出来事いらい熱が下がらずにいた。

「お主とて怪我人ではないか。そうそう動き回ってばかりいては治るものも治らぬぞ。利き腕が使えなくては、弓はおるか刀とて満足に扱えぬだろう。那賀是きつてのじゃや馬娘も、爪と牙をそがれては、この老い耄れと大差ない。これで少しは大人しくなってくれば怪我の功名というものじゃがな」

そういつて巫人は布で釣った日夏の右手を目で示す。日夏もそれを追って自分の腕に視線を落とす。

包帯の巻かれた右腕は、まだ力が入らず、動かすたびに痛みが走る。

「この腕は、己の慢心と未熟の結果だと思っています」

「止められると思うておったか？」

「…はい」

この五日間というものの、何度となく頭の中で反芻した情景が再びよみがえる。

そこにいるのは、血塗れの刹羅であり、暴走した衍葵であり、その中であって、あまりにも無力な自分であった。

思い出すほどに、自分は自分に為しうることを十分に為してなどいなかったという気がしてならない。

変えられたはずだった。止められたはずだった。もしもあの時あ
あしていれば、と無意味な仮定にとりつかれ、身をやくような悔恨
を噛み締める。

痛みを伴う映像を、繰り返し己に見続けることを強いるのは、た
だ忘れないようにするためだ。

衍葵が流した血を、喉をつぶさんばかりの異様な咆哮を、悲鳴を、
無力だった自分とそれが招いた結果とを、等しく心に刻みつけ楔に
しなければならぬ。もう二度と同じものを見ないために。

「私が衍葵を止めなければならなかった。他の誰よりも私には、
その責任があつた。なぜなら私が衍葵を神山から助け出し、私だけ
が衍葵の友だったのだから」

私だけが。

それは慢心でも自意識過剰でもなく、この五日間という事後経過
の末に抱かざるを得なかった実感だった。

いま集落は恐怖と混乱と、一種の躁状態に揺れている。あの場に
いなかった者までもが、あの日の出来事を自分なりに解釈し、これ
から起こるべくして起こることを見定めようと、真偽なかばの情報
が入り乱れている。

むろん、その噂の中心人物は、いま監禁状態にある「化物憑き」
の衍葵だ。

彼等は問う。

——何が衍葵にとり憑き、衍葵の何をして憑き物を寄せ付けた
のか？ 神山を燃えたのも、やはり同じ理由のせい？ なぜ、襲
われたのが他の誰でもなく刹羅様だったのか？

彼等は言う。

——衍葵は刹羅様を恨んでいたのではないだろうか。憎んでい
たのではないだろうか。いや、きっと刹羅様だけではない。ひよっ
として、部族のもの全員……

——衍葵によくしてやっていた日夏だって、やられたんだ。俺達なんて言うに及ばずさ。

——俺はあの時、衍葵を止めたんだ。刹羅様に止めの一撃をさそうという所をな。だから俺はあの腕にこめられた力を知っている。ためらいなんて微塵もなかったよ。信じられるか？ 相手は父親だったんだぜ。いくら化け物にとり憑かれていたからって、なあ？

——父親を殺したいほど恨むことだってある。それに、刹羅様は衍葵にとって、決して良い父ではなかった。

——かわいそうな子よ。いつも一人だった。刹羅様のなさりようも衍葵には酷だったと思うわ。だから……あの子の気持ちも分からないではない。いつか、こんな事になるんじゃないかと。

——ああ。人の目を、ちゃんと見ようとしないう陰気な奴だった。得体のしれない所があった。腹の底で何を考えてたかなんて分からんさ。

——神山が燃えたのにしたって……あいつは『成人の儀』を嫌がっていたっていうじゃないか。

そういう会話が今の集落では、所を変え、人を変え、ひっきりなしに繰り返されている。推測の域を出ない、衍葵の内面に立ち入った勝手な憶測がまことしやかに囁かれ、全ての元凶は衍葵だったという向きになりつつある。

じっさい一連の凶事には何かしら繋がりがあるのだろうか、そうでなくても全ての出来事を一つの原因で片付けたいと思うのが人なのだろう。

彼等は、まさにそれを衍葵に見出し、確たる証拠もなく神山炎上の責任までもを衍葵に負わせようとしている。衍葵にも同情の余地はあるという意見にしても、衍葵元凶説を下地にしているという点ではなんら変わりはない。

それをもって彼等を責めることはできない。また自分にはその資格もないと日夏は思う。自分自身、他の人間に負けず劣らず、この

一件に関しては冷静を保てず客観性を見失っている。

そもそも自分さえ衍葵を連れ帰ってこなければ、集落の皆が危険に晒されることもなく、刹羅が怪我をすることはなかった。これは事実だ。衍葵を助けにいったことを後悔することはないが、自分が負った責任を果たせなかったことは確かだ。

しかし、それでも思わずにはいられない。

彼等が衍葵を語る口調は、中傷にしろ同情にしろ、あくまでも他人のものだ。他の誰か、自分達ではない誰か、もはや衍葵ではなくなった誰かを前提にした物言いは、ついこの間まで一緒に暮らしてきた衍葵を、もはや同じ部族民とは見ていない。

そこに画された一線は、脅えであったり、憤りであったり、さまざまだが、全て部族会議が衍葵に下すだろう処罰を前倒しに受け入れたものだ。

曰く、日夏と刹羅様を傷つけた衍葵は、決して許されることがないだろう。また、許されるべきでもない。

第五章 きずあと (3)

「…日夏」

白くなるほど握り締めた日夏の拳に巫人は手を重ねる。

「お前のその真っ直ぐさは得難いが、自分一人で何もかも止められたと思うことこそが驕りではないか？ それにお前は、ひどく衍葵の肩をもつが、事実だけとれば、あやつが刹羅とお前に刃を振るい、傷つけたことには変わりないのだ。あやつが神山に入って何かに憑かれおったその夜に、神山が燃えたことも」

「だからといって、その全てを同源だと考えるのは性急でしょう。それに神山が燃えたことと衍葵の異変とは、まず切り離して考えるのが筋です。因果関係があるにしても、衍葵が神山を燃やしたわけではない」

巫人は、重い溜息をついた。

「なぜ、それほどまでに衍葵にこだわる？ 神山の事を抜きにしても、あやつはもはや罪人じゃ。だいたい自分に刃を向けたものを庇いだてする義理がどこにある？」

「義理などではありません」

「では友情か？ いや、違うな。そんなものは、友情という名を借りた、ただの偽善じゃよ。お前は何かも持っていない衍葵に同情しているだけじゃ。衍葵よりもずっと優位な立場にあつて、その格差に引け目を感じるから、ほどこし気分で友人を気取ってるに過ぎん。可哀想だからというのは友情ではない。優位者の驕りじゃ。鼻持ちならん親切の押し売りじゃよ。持てる者の持たざる者への憐れみは、軽薄で残酷。結果的にはより相手を傷つけるだけだ」

父にも同じことを言われた事を思い出す。

お前は同情から衍葵を構っているだけだと。お前のような恵まれ

た立場にある者に始終まとわりつかれる衍葵の気持ちを考えた事があるかと。

日夏は低く笑った。くぐもった笑いだった。

「衍葵が可哀想だから？」

視線を上げ、巫人に対する。

「誰よりもそう考えているのは、あなたや父上達ではないのですか？あなた方は正にその憐れみをもって衍葵を遠ざけ、罪悪感を紛らわせてきた。過去に何があつたか私は知らないが、少なくとも、あなた達や衍葵の態度を見ていれば、それがどういう種類のものだったかは分かる。」

それによつて、あなた達は心に負い目を抱える結果になった。だから衍葵をあわれむ。そう、憐れみは軽薄で残酷です。あなた達は正にそうやつて衍葵を傷つけてきた」

たじろいだように見える巫人の瞳の中に、日夏は相手を糾弾する自分の姿を見る。

己の事を棚に上げ、相手の弱味に付け込む自分の姿をそこに発見して、気がついた。自分は巫人に対して怒りを感じている。

「あの夜、あなたはまるで過去の亡霊でも見るように衍葵の言葉に応じていた。それはなぜです？『あの女』とは誰のことですか？それは…亜紗殿のことですか？」

亜紗、本来の音でアーシャという。衍葵の母親の名は。

巫人は視線をそらす。こころなしか乱れた呼吸が彼の動揺をあらわしている。

「それを知つてなんとする。関係のないことだ。過去のことだ。知つたところで何が変わえられる訳でもない。誰も悪くなどなかった。剎羅とて、したくてしたことではない」

「なら、なぜ誰も語らないのです？語らないまま、いつまでも引き摺っているのです？」

「醜聞だからだ。語ったところで、誰ひとり喜ぶ人間などいないし、部族の名を落とすだけだからだ。それに、これは、刹羅と衍葵に関わることで、彼等や族長の許しなしにわしの一存でお主に話すわけにはいかない」

確かにそれが筋だろう。

しかし、父は――族長は語るまい。

「では、一つだけ。衍葵の隻腕も……今はもう違うとしても、やはり事故によるものなどではなく、その一件によるものなのですか？」
巫人はしばらく黙っていたが、ややあつて頷く。

「刹羅が落としたと聞く」

日夏は目を瞑った。

眩暈のような、胸焼けのような不快な感覚の中で、驚くと同時になにか色々なことが腑に落ちていくような気がした。

衍葵の横顔が脳裏にちらつく。

いつも遠くからしか刹羅を見つめる事のなかった衍葵。決して応える事のない父親の背中に、衍葵は何を見ていたのだろう。

その灰緑色の眼差しに託した感情は、自分の腕を切り落とした父親への憎しみだったのか思慕だったのか。

許したかったのか、許したくなかったのか。

振り向いて欲しかったのか、拒絶して欲しかったのか。

いずれにせよ、刹羅がそれに応える事はなかった。

刹羅は衍葵をいないものとして扱い、無視した。どんな答えも与えてはくれなかった。

二人の関係はそこで硬直し、衍葵は前進も後退も出来ないまま、時ばかりが降り積もっていった。

あの神山炎上の夜までは。

第五章 きずあと (3) (後書き)

お詫びアンドお知らせ：

4・21? づけでランキング投票に参加したものの、間違つて現代FT部門に登録してしまうというボカを犯してしまいました(汗) しかも、しばらく気付かなかった。己の馬鹿さ加減に呆れました。

既に現代FT部門の登録は削除しており、ほどなく異世界FT部門に移動と相成りますが、せっかく投票をしてくださった方々、本当に申し訳ありません。

そして拙作に投票していただいた方、読んでいただいた方、本当にありがとうございました。

m (((m

第五章 きずあと (4)

「わしは、この目で見たわけではないし、その経緯を、衍葵や刹羅に問いただしたことはない……問いただせるわけもない。ただ、あの欠けた右腕を見るたびに、そして今回の事件も…あの一件を重ね合わせて見てしまったという事は否定しない」

脳裏にちらつく衍葵の顔に、下手な同情を重ねてしまわぬよう日夏は自己を律する。いま大事なのは過去の出来事に憤ることではなく今の衍葵を救えるかどうかだ。

「……そうですか」

感情を抑えたつもりだったが、その声はやはり相手を責める響きをともしなつて聞こえた。

「では、あの夜の曾様の託宣も、私情が絡んだもので真性の巫技ではないと思つていいのですか」

あの夜、神山から戻った衍葵を巫人は不吉な託宣で迎えた。

「それは、違う！」と巫人はやおら声を荒げる。

「あれは危険なものだ。あれこそが衍葵にとり憑き狂わせたものだ。あの瘴気……憤怒、憎悪、狂騒、飢餓感。禍々しい波動。わしが感じたあの感覚だけは、嘘ではない。託宣は本物だった。わしは衍葵の中にいる『あれ』に触れた。」

あれは…そう、化物としかいいようがない。黒い何かを煮詰めたような、濁った闇。憑き物を宿した人間に共通するものだが、あれほどの感覚を覚えたのは初めてのことだ」

確かに、あの時の衍葵は、憑かれているとしかいいようがなかった。平素の衍葵とは似ても似つかぬ表情をして、衍葵ではありえない言動を示した。

それに神事に用いる祭儀用の短刀で、あれほどまでの負傷を刹羅

に負わせられたというのは、はっきりとおかしい。自分の傷にしたところで、どうも治りが遅いように感じるのは気のせいではないかもしれない。

「ならば、あれは何だというのです？ 神山の主が化物で、それにとり憑かれたとでも？」

「しかとした事は分からない。分からないが、あんな禍々しいものが神山の主であろう筈がない。主は死んだ。この山にいて感じぬか？」

そういつて、巫人は灰の地面に膝をつき、掌をつけた。

「ただ燃えただけではない。この山に集まっていた地の気が、そう、主の存在によって集められていた気が、一気に拡散したような……いや違う。忽然と、どこへともなく立ち消えたのだ……もう、この神山は神山ではない。たとえ、また草木が生えてこようと、山は元通りにはならぬ。山は主あつての山じゃ。主なくしては栄えぬ」

日夏は戸惑いを露にした。

「主とは、その、本当に存在するものなのですか？」

神山には主が棲む。

山を守り、生命を寿ぎ、実りをもたらすが、時として傲慢な侵入者に罰を下す。

そんな話は昔語りによく聞いたが、それを文字通りの意味で受け入れていたわけではない。少なくとも、死んだ死ないと論ずることが出来るほど実態のある存在だとは思ったことはなかった。

巫人はその様子をみて溜息をつく。

「わしの語る全ては、どうやらお主たちには子供騙しの御伽話と受け取られておったようじゃの」

「……………」

「神山が禁足地であつたのは、相応の理由のあることじゃ。主はいる。いや、いたというべきか。みだりに山に立ち入れば、主の怒

りに触れる。それに昔の風習に、凶事が続くと山の主に乙女を生贄を捧げるというものがあつてな。若い女が山に入れば、主にかどわかされると言う。神山の女人禁制は、ある意味その名残といえよう。なんにせよ、山の主は、穢れなきを好み、穢れを厭う」

穢れ。

あの時も巫人はそんなことを言っていた。衍葵は穢れに捕らわれた、と。

「『山喰い』、『わたり』、『穢れ』……そう言ったものを聞いたことはあるか？」

「いえ。私が覚えてる限りでは曾様の昔話に登場した事はないと思いますが」

「口にすると、そのものを呼び寄せるといふからの……色々な名でかたられるが、その指し示すところは同じじゃよ。地を渡り、山を喰い、草木を枯らし、行く先々に瘴気を撒き散らす。

その姿は融通無碍。その本性は、救われることのない憎悪、収まるところを知らない憤怒、底のない絶望、癒やされることのない渴き、満たされることのない餓え」

「なにやら、随分と抽象的ですね。それが、衍葵を『のつとつた』と？」

巫人は日夏の懐疑的な反応に溜息をついた。

「わしとて信じておらんかったさ。少なくとも、そんなものが跳梁しておった時代は過ぎ去ったと。しかし、わしはあの夜の衍葵を見たとき、真っ先に頭に浮かんだのがそれじゃった。その直感を神託と認めるか、私情の絡んだわし個人の解釈というかは、お主らに任せる。しかし衍葵にとり憑いたものが何であれ、尋常なものではない事は確かじゃ」

「しかし、ただそれのみでは——」

「人の話は最後まで聞けと教えたはずじゃ」

と巫人は日夏の抗弁を遮った。

「衍葵自身の証言もあるのじゃよ。あやつは神山で二体の異形の死闘を目撃したと言っておる。その内の一体が自分に話しかけてきたとも。そしてどうやら、あいつは己の身にそれを受け入れたらしい」

本当なら部族会議の参加者以外に話すべきことではないのだがな、と巫人は付け加えたが、日夏はもはや聞いてはいなかった。

（あの馬鹿）

実際、衍葵の身に何があつたか、巫人の言う事のどこまでが信頼におけるのか日夏には分からない。しかし。

（何を好き好んで、自分の不利になる証言をする？ 嘘をでつちあげるとまでは言わないが、せめてだんまりを決めこむなりなんなり、いくらでも仕様があるだろう？

分からないのか？ 今の状態で、そんな証言をした日には、部族会議はお前を……）

その先の言葉を考えて、日夏は唇を噛んだ。

そんな日夏の様子を見ながら巫人は溜息をつく。

「正直、衍葵に憑いたものが、何と呼ばれるものであれ、何が変わるわけではない。山食いであれ、人の心の住まう小鬼であれ、同じように、人を惑わす穢れには違いない。問題は、あれが小物などではないということ。実態をともなつた、より強力な何か……衍葵の自我など、すぐに飲み干してしまうじやろう」

「被えないのですか？」

「被う、か」

巫人は皮肉気な表情を浮かべた。

「族長様にも同じことを聞かれた。被えるといえるかどうかは怪しいが方法はある」

「なら——」

「だが宿主ごとそうする事になる」

巫人の表情を見て、日夏はその意味するところを察する。

宿主である衍葵ごと、憑き物を抜つ。

「…それは」

声が喉に絡む。

「衍葵を殺すということですか？」

「そうだ」

巫人は日夏の肩を叩く。

「それが部族にとって最良の選択だ…それにこれは衍葵自身の希望でもある。自分の自我が食い尽くされる前に、一刻も早く自分ごと化け物を殺してくれ、とな。ああ見えて、なかなか気丈夫な奴だ。正直、わしは衍葵を見直したよ」

日夏は左手の拳を握り締める。爪が食い込み、血が滲むほど強く衝撃を冷静に受け止め、感情に流されずに、ただ確認すべきことを確認するために。

「それは、父上には…族長にはもう進言されたのですね？」

「ああ。それがもつとも確実な方法あり、そして恐らくは唯一の方法だと……わしを恨むか？日夏？」

「いえ」

本心とは言えない。

恨む気持ちはない、などとは言いきれない。

しかし巫人は族長に求められるまま、己の知識と見解を述べたに過ぎない。

彼は彼の規範にしたがつて部族のために行動している。ただ己一人の感情から衍葵を助ける事に固執している自分が、どうして巫人を責めることが出来るだろう。

そして、父も……部族の長として下すべき判断を下すだろう。協議の末に、現時点で最善とおもえる決断を下すだろう。

そして、その答えを日夏はすでに知っている。私が父であれば――

（衍葵を殺す事に同意する）

衍葵は凶事を運んできた。

衍葵をこのまま野放しにしておく危険性は明らかだ。

いまや衍葵の存在は族民の心を乱すものでしかない。

そして神事をつかさどる部族の三長の一人である巫人が、その解決策を提示しているのだ。反対する道理がどこにあるだろう。

衍葵を殺す決定は、妥当だ。



「…曾様、曾様がおっしゃったこの右腕、確かに不便なのです」
長い沈黙の後に、脈絡のないことを話し始めた日夏を、巫人はいぶかしげに見た。

「動くべきものが、動かない。何かの拍子に、利き腕を使おうとしている自分を発見します。弓を取り上げて、初めて、自分がそれを引けないことに気付く。体の一部のごとくあったものたちが、突如として反乱を始めます。普通の作業が難しくなり、当たり前前に出来ていたことが出来なくなり、人の手助けを必要とすることもある。じきに治ると分かっているのに、今まで開かれていた世界から急に締め出しをくったように感じて、自分を心もとなく思うことがあります……曾様ばかりでなく父にも同じことを言われたことがあります。」

お前は何も分かっていない、と。私の行為は、持てる者の傲慢であり、哀れみであり、それゆえに無責任であると」

淡々とした口調は、しかし常でない緊張をはらんでいる。拳を握り締めたまま、顔を俯けて、喋り続ける日夏を前に巫人は言葉を挟めなかった。

「その通りかもしれないと思います。同情し、哀れんでいるだけなのかもしれない。知らず知らずの内に衍葵を傷つけていたのかもしれない……私は衍葵のことを、おそらく自分で思っていたほど知りたくない。だから――」

「…日夏」

巫人が労わるように伸ばした手が届くまえに、日夏は顔を上げた。巫人の案に相違して、その顔に涙はなかった。

「だから知りたいのです。自分の気持ちも、衍葵の気持ちも…何も知らないまま、納得のゆかぬまま、衍葵を殺させるわけにはいかないのです」

そうと決めたものの瞳が真っ直ぐに巫人を見る。

決意ではない。己が正しくないと分かっているものに決意などない。だが迷いもない。

一途な瞳だと巫人は思った。この一途さは、果たしてこの先、那賀是に吉兆と凶兆の何れを運んでくるのか。

「勝手なことばかり言っている自覚があります。私情で動いている事も承知の上です。ですが曾様には先に申し上げておきたかった…私は衍葵を殺させやしません」

歪みのない、直ぐな眼差しが宣言する。

「たとえば、それで曾様や父上…いえ部族全体を相手どることになることも」

第六章 歪 (1)

「——あれから何日立ったのだろうか？」

ここに閉じ込められてからというものの時間の感覚が消失している。日に数回、見張り番が置いていく食事を数えれば、逆算できたのかもしれないが、そうしようという気持ちは起きなかった。

時間の感覚だけでない。ありとあらゆる感覚が刻一刻と麻痺していく。あの神山で味わった死の手触りと同種のものが、もつとずつと緩やかに穏やかに、自分を絡めとっていくのを感じている。

刻一刻と弱っていく自分の体を見つめながら衍葵はただ一つのことだけを考えて、その時を待っている。

後どれだけ待てば、すべてが終わるのだろうか？

(喰え。喰わなければ体力が衰えるばかりだ)

頭の一隅の嘔きにも、もうさほど心を煩わされる事はない。

目と鼻の距離にある食べ物にも胃は反応しない。体が重く、砂袋でもなったみたいに痛みも空腹も感じない。

懸念はたった一つ、全てが消えてなくなる際この声の主も共に消え去ってくれるだろうかという事だけだ。

(俺は貴様と心中なんて御免だ)

びくびくと捕縛された腕が衍葵の意志とは無関係に、のた打ち回る。

それを衍葵は視界の端に、見るともなしにぼんやりと見ている。目覚めたばかりの頃、意志をもった右腕の暴走の度に、躍起になって止めようとしていた自分が今は懐かしい。

どんな理由があるにしろ、忌々しい右腕は、この戒めをほどこけない。そう理解した時、初めて安寧が訪れた。

「無駄だよ。その縄は頑丈だし、巫人さまの霊力が込められている。お前は、このまま、僕と一緒に縄に繋がれたまま死ぬんだ」

（靈力？ 笑わせるな。あんな呪い師くずれに何ができる）

だが現に押さえつけられているのではないのか、と衍葵は思う。しかし、ではなぜかと問いかけてみる気も起きない。質問したところで親切に答えてくれるものとも思えないし、遅かれ早かれ全てが終わる。

会議が終わり、決が下れば自分の処遇も決まるだろう。

そして、下されるだろう決は恐らく――

衍葵は瞑目する。

神山の森にいた時、自分は死を畏れた。

惜しむような命でもないというのに、自分の命の終わりを実感したとき心が乱れた。たった一人死んでいく自分が惨めで仕方がなかった。自分で自分を哀れんで泣いた。

今は違う。

今は、凪いでいる。死はもはや怖いものではない。

そう、死はいまや衍葵に残された唯一の選択であると同時に義務でもある。

この忌まわしい右腕を己ごと葬り去る。最後の最後まで、自分の中に押さえ込み、止め続ける。そうする事が出来るなら、自分の命など、どうなろうと知った事ではない。

意味のない死などではない。そこには明確な目的意識がある。意義が存在する。

それこそが自分に為しえるたった一つの贖罪だと、衍葵は信じている。

いや、信じたかったのだ。そう信じなければ、今にした所で、ぎりぎりの所に立っている衍葵の精神は当の昔に崩壊していただろう。あがなうことの出来ない罪。意味のない死。そんな事を考えながら、どうして終わりの時まで正気を保っていられるだろう。

（笑わせる。何をいまさら死にたいなどと言う？…あの夜、生きたいと望んだのは貴様だ。いいか、誰に強制されたわけでもない。貴様が俺を受け入れたんだ）

そう。だからだ。『僕』がお前を受け入れた。『僕』がお前を生かした。『僕』が^{ながせ}那賀是に災いをもたらした。だから――

（死ななければならぬ？）笑いの気配がざわめく。（自分で選んだ選択が、不都合な結果を産むや否や、今度は悲壮感を気取って『死』に逃避するのか）

逃避と呼びたいのなら呼ばいい。何と呼ぼうが、結果は変わらない。

（いい加減、自分自身を哀れむのはよせ）

…哀れむ？

そこで何かが唐突に腑に落ちた気がして、衍葵は笑った。長い間、水分を取っていない干からびた喉が、渴いた笑いに震えた。

…そう、その通りだ。まったくその通りだ。
自分自身を哀れむ。

僕の生きてきた人生は正に、その一文につきる。

僕は弓が引けない。

刀ひとつ満足に扱えはしない。

戦う事が出来ない。

でも仕方がない。だって僕には右腕がない。

人を傷つけるのが怖い。

生き物を傷つけるのが怖い。

斬って出る赤い血が怖い。

刃を向けるのも、向けられるのも怖い。
きつとこのままでは、自分の命も大切な人の命も守れはしないだ
ろっ。

でも仕方がない。だって世界は怖いもので溢れている。
僕の中身も怖いもので埋まっている。

僕は臆病だ。

僕は卑怯だ。

僕はあざとく、僕は騙し、僕は裏切る。

僕は人に失望を与えることしか出来ない。

僕は信頼に答えることが出来ない。

だから僕は諦める。

でも仕方ないじゃないか。だって僕は彼女のように強くはない。

好きで弱いわけじゃない。好きで片輪なわけじゃない。

だから許してくれたっていいじゃないか？

——そう、これが僕だ。

嘆くことで、哀れむことで、陶醉することでしか、自分自身と折
り合いを付ける事が出来なかった。そうすることが、惨めな自分の
在り方に対する唯一の弁明の方法だった。

そう、自分を哀れむのは、まだ自分を諦めきれていない証拠だ。
自己嫌悪も自己憐憫も、結局はまだ自分が可愛いからだ。だから人
に否定されれば傷つくし、これ以上、傷つけられまいと防護壁をつ
くる。誰かに非難される前に、先回りして自分で自分を批判する。
そうして自分で自分を傷つけ、自分で自分の傷口を舐めてきた。
人の気持ちよりも自分の気持ちの方が大事で、本当は誰よりも自分が可
愛い。反論も反抗もしないのは、優しいからでも大人しいからでも
ない。その方が傷つかないと知っているから。

ずるくて臆病で自分本位だった。自己の保身こそが唯一の行動規範であり、そのためなら自分自身にすら心を偽った。幾重にも嘘を重ねた心は、群生した木の根のように複雑に絡まりあって、もはや自分自身にすらどこまでが嘘で、どこからが本音だったか分からない。

薙をはじめとする人々が、なぜ自分をああまで嫌ったのか、今なら分かるような気がする。

この心の形は、『衍葵』という人間は——どうしようもなく歪で、醜い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6039b/>

右腕

2010年10月9日15時23分発行